

# 基本計画書

基本計画									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	研究科の設置								
フリガナ設置者	がっこうほげん トキョウノキョウダイガク								
フリガナ大学の名称	学校法人 東京農業大学								
大学の位置	トキョウノキョウダイガク								
大学の目的	東京農業大学大学院 (Graduate School of Tokyo University of Agriculture)								
大学の目的	東京都世田谷区1丁目1番地1号								
大学の目的	<p>本大学は、その伝統及び私立大学の特性を活かしつつ、教育基本法に則り、生命科学、環境科学、情報科学、生物産業学等を含む広義の農学の理論及び応用を教授し、有能な人材を育成すると共に、前記の学術分野に関する研究及び研究者の養成をなすことを使命とする。</p>								
新設学部等の目的	<p>本研究科は、生物に対する理解と知識を基にして、自然と人間の調和ある地域環境を構築するための生物資源の保全・利用・管理に関する科学技術を考究し、確立することを目指す。本研究科が研究対象とする地域環境は、我々の身近な生活環境はもとより、生命に影響を与えるより広域な環境問題、さらには地球環境問題に及ぶものであり、これらの諸問題の解決に貢献する高度専門技術者・研究者の養成を目的とする。</p> <p>博士前期課程では、地域環境に関する諸問題に対する理解力と課題解決のための専門知識を有し、生物資源の保全・利用・管理に関する専門知識と専門技術を習得した、そして取り扱う諸問題の社会的意義を自覚し、責任感を持って課題解決にあたる事が出来る高度な倫理観と使命感を有する高度専門人材の養成を目指す。博士後期課程では、地域環境に関する諸問題に対する高度な理解力と課題解決のための高度専門知識を有し、生物資源の保全・利用・管理に関する高度な知識と高度専門技術に基づいた課題解決のための研究手法を習得した、そして社会的意義を自覚し、責任感を持って研究にあたる事が出来る高度な倫理観と使命感を有する高度専門研究人材の養成を目指す。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	<p>【基礎となる学部】                      地域環境科学部                      森林総合科学科、                      生産環境工学科、                      造園科学科、                      地域創成科学科                      農学研究科                      林学専攻(M)、                      農業工学専攻(M)、                      造園学専攻(M)、                      林学専攻(D)、                      農業工学専攻(D)、                      造園学専攻(D)</p>
	地域環境科学研究科 [Graduate School of Agro-Environmental Science]	—	—	—	—	—	—	東京都世田谷区桜丘1-1-1	
	林学専攻 (M) [Department of Forest Science]	2	8	—	16	修士 (農学) 【Master of Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	農業工学専攻 (M) [Department of Agricultural Engineering]	2	8	—	16	修士 (農学) 【Master of Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	造園学専攻 (M) [Department of Landscape Architecture]	2	10	—	20	修士 (農学) 【Master of Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	地域創成科学専攻 (M) [Department of Rural Science]	2	6	—	12	修士 (農学) 【Master of Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	林学専攻 (D) [Department of Forest Science]	3	2	—	6	博士 (農学) 【Doctor of Philosophy in Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	農業工学専攻 (D) [Department of Agricultural Engineering]	3	2	—	6	博士 (農学) 【Doctor of Philosophy in Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	造園学専攻 (D) [Department of Landscape Architecture]	3	2	—	6	博士 (農学) 【Doctor of Philosophy in Agricultural Science】	令和3年4月	同上	
	計	—	30	—	66	—	—	—	

同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)	東京農業大学大学院 農学研究科 バイオサイエンス専攻(M)(廃止) (△30) 林学専攻(M)(廃止) (△12) 農業工学専攻(M)(廃止) (△ 8) 造園学専攻(M)(廃止) (△12) 国際農業開発学専攻(M)(廃止) (△12) 農業経済学専攻(M)(廃止) (△10) 国際バイオビジネス学専攻(M)(廃止) (△12) バイオサイエンス専攻(D)(廃止) (△ 6) 林学専攻(D)(廃止) (△ 4) 農業工学専攻(D)(廃止) (△ 2) 造園学専攻(D)(廃止) (△ 3) 国際農業開発学専攻(D)(廃止) (△ 2) 農業経済学専攻(D)(廃止) (△ 5) 国際バイオビジネス学専攻(D)(廃止) (△ 5) 環境共生学専攻(D)(廃止) (△ 5) ※令和3年4月学生募集停止 生命科学研究所(令和2年4月届出予定) バイオサイエンス専攻(M) ( 30) 分子生命化学専攻(M) ( 20) 分子微生物学専攻(M) ( 20) バイオサイエンス専攻(D) ( 5) 国際食料農業科学研究所(令和2年4月届出予定) 国際農業開発学専攻(M) ( 18) 農業経済学専攻(M) ( 8) 国際アグリビジネス学専攻(M) ( 10) 国際食農科学専攻(M) ( 7) 国際農業開発学専攻(D) ( 2) 農業経済学専攻(D) ( 2) 国際アグリビジネス学専攻(D) ( 2) 令和3年4月名称変更予定 東京農業大学大学院 農学研究科 畜産学専攻(M) → 農学研究科 動物科学専攻(M) 農学研究科 畜産学専攻(D) → 農学研究科 動物科学専攻(D)								
	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数			
教育課程	新設学部等の名称	講義	演習	実験・実習	計				
	林学専攻(M)	19 科目	6 科目	5 科目	30 科目	30 単位			
	農業工学専攻(M)	20 科目	5 科目	6 科目	31 科目	30 単位			
	造園学専攻(M)	14 科目	5 科目	1 科目	20 科目	30 単位			
	地域創成科学専攻(M)	15 科目	5 科目	5 科目	25 科目	30 単位			
	林学専攻(D)	6 科目	3 科目	1 科目	10 科目	17 単位			
	農業工学専攻(D)	10 科目	3 科目	1 科目	14 科目	17 単位			
	造園学専攻(D)	8 科目	3 科目	1 科目	12 科目	17 単位			
教員組織概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
	新設	地域環境科学研究科(M) 林学専攻 農業工学専攻 造園学専攻 地域創成科学専攻 生命科学研究所(M) バイオサイエンス専攻 分子生命化学専攻 分子微生物学専攻 国際食料農業科学研究所(M) 国際農業開発学専攻 農業経済学専攻 国際アグリビジネス学専攻 国際食農科学専攻	教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等
			人	人	人	人	人	人	人
			8	6	0	0	14	0	2
			(9)	(6)	(0)	(0)	(15)	(0)	(1)
			11	4	0	1	16	0	2
			(11)	(4)	(0)	(1)	(16)	(0)	(2)
			7	4	0	0	11	0	1
			(7)	(4)	(0)	(0)	(11)	(0)	(1)
			8	4	0	0	12	0	1
			(8)	(4)	(0)	(0)	(12)	(0)	(1)
			8	6	0	0	14	0	9
			(8)	(6)	(0)	(0)	(14)	(0)	(9)
			4	4	0	2	10	0	2
(4)	(4)	(0)	(2)	(10)	(0)	(2)			
4	6	0	0	10	0	2			
(4)	(6)	(0)	(0)	(10)	(0)	(2)			
10	2	0	0	12	0	8			
(10)	(2)	(0)	(0)	(12)	(0)	(8)			
8	4	0	0	12	0	6			
(8)	(4)	(0)	(0)	(12)	(0)	(6)			
9	4	0	0	13	0	3			
(9)	(4)	(0)	(0)	(13)	(0)	(3)			
6	6	0	0	12	0	4			
(6)	(6)	(0)	(0)	(12)	(0)	(4)			
計		83	50	0	3	136	0	-	
		(84)	(50)	(0)	(3)	(137)	(0)	(-)	

教 員	新 設	地域環境科学研究科 (D) 林学専攻	8 (8)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	1 (1)		
		農業工学専攻	10 (10)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	15 (15)	0 (0)	1 (1)		
		造園学専攻	7 (7)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	1 (1)		
		生命科学研究科 (D) バイオサイエンス専攻	8 (8)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	3 (3)		
		国際食料農業科学研究科 (D) 国際農業開発学専攻	10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)		
		農業経済学専攻	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)		
		国際アグリビジネス学専攻	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)		
		計	59 (59)	29 (29)	0 (0)	1 (1)	89 (89)	0 (0)	- (-)		
		組 織	既 設	農学研究科 (M) 農学専攻	14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	3 (3)
				畜産学専攻	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	4 (4)
バイオセラピー学専攻	10 (10)			4 (4)	1 (1)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	2 (2)		
応用生物科学研究科 (M) 農芸化学専攻	10 (10)			3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	3 (3)		
醸造学専攻	5 (5)			6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	1 (1)		
食品安全健康学専攻	9 (9)			3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)		
食品栄養学専攻	9 (9)			4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	4 (4)		
生物産業学研究科 (M) 生物生産学専攻	8 (8)			5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	2 (2)		
アクアバイオ学専攻	6 (6)			4 (4)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	1 (1)		
食品香粧学専攻	7 (7)			2 (2)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)		
産業経営学専攻	7 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	1 (1)				
計	94 (94)	42 (42)	3 (3)	0 (0)	139 (139)	0 (0)	- (-)				
の 分	既 設	農学研究科 (D) 農学専攻	14 (14)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	0 (0)		
		畜産学専攻	9 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	4 (4)		
		バイオセラピー学専攻	9 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)		
		応用生物科学研究科 (D) 農芸化学専攻	8 (8)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)		
		醸造学専攻	5 (5)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)		
		食品安全健康学専攻	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	0 (0)		
		食品栄養学専攻	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	0 (0)		
		生物産業学研究科 (D) 生物産業学専攻	27 (27)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	29 (29)	0 (0)	0 (0)		
		計	90 (90)	18 (18)	0 (0)	0 (0)	108 (108)	0 (0)	- (-)		
		合計	177 (178)	92 (92)	3 (3)	3 (3)	275 (276)	0 (0)	- (-)		
要 の 概 要	教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種	専 任		兼 任		計				
		事 務 職 員	149 (149)	人	17 (17)	人	166 (166)	人			
		技 術 職 員	22 (22)		6 (6)		28 (28)				
		図 書 館 専 門 職 員	5 (5)		1 (1)		6 (6)				
		そ の 他 の 職 員	1 (1)		7 (7)		8 (8)				
		計	177 (177)		31 (31)		208 (208)				

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	東京農業大学第一高等 学校(収容定員1,050 人、面積基準 運動場 8,400㎡)、中等部(収容 定員450人、面積基準 運動場4,950㎡)と共用 借用地積：3,570.24㎡ 借用期間：60年					
	校 舎 敷 地	354,079.78㎡	0㎡	15,350.76㎡	369,430.54㎡						
	運 動 場 用 地	31,147.98㎡	30,935.81㎡	6,453.99㎡	68,537.78㎡						
	小 計	385,227.76㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	437,968.32㎡						
	そ の 他	2,664,609.34㎡	0㎡	0㎡	2,664,609.34㎡						
合 計	3,049,837.10㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	3,102,577.66㎡							
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体					
		226,036.40㎡ (238,874.66㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	226,036.40㎡ (238,874.66㎡)						
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体					
	101室	60室	637室	8室 (補助職員 2人)	1室 (補助職員 0人)						
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数		申請研究科全体					
		地域環境科学研究科		64 室							
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	○標本 学部単位での特定不能 なため、大学全体の数 ○大学全体での共用図 書266,525〔21,805〕 ○学術雑誌、電子ジャー ナル、視聴覚資料は、大学 全体の数			
	地域環境科学研究科	285,946〔54,850〕 (269,637〔52,821〕)	18,514〔10,758〕 (18,514〔10,758〕)	8,768〔8,583〕 (8,768〔8,583〕)	7,872 (7,650)	2,636 (2,636)	33,778 (33,778)				
	計	285,946〔54,850〕 (269,637〔52,821〕)	18,514〔10,758〕 (18,514〔10,758〕)	8,768〔8,583〕 (8,768〔8,583〕)	7,872 (7,650)	2,636 (2,636)	33,778 (33,778)				
図 書 館		面 積		閲 覧 座 席 数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		8,026.19㎡		1,383		1,162,000					
体 育 館		面 積		体 育 館 以 外 の ス ポ ー ツ 施 設 の 概 要							
		10,371.27㎡		野 球 場 2 面 テ ニ ス コ ー ト 6 面							
経 費 の 見 積 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第 1 年 次	第 2 年 次	第 3 年 次	第 4 年 次	第 5 年 次	第 6 年 次		
		教員 1 人 当 り 研 究 費 等		384千円	384千円	384千円					
		共 同 研 究 費 等		5,998千円	5,998千円	5,998千円					
		図 書 購 入 費	181千円	205千円	205千円	205千円					
		設 備 購 入 費	3,985千円	1,967千円	1,967千円	1,967千円					
	学 生 1 人 当 り 納 付 金	第 1 年 次		第 2 年 次	第 3 年 次	第 4 年 次	第 5 年 次	第 6 年 次			
		1,460.6千円		1,240.6千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	林学専攻 (M) 農業工学専攻 (M) 地域創成科学専攻 (M)		
		1,430.6千円		1,200.6千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	造園学専攻 (M)		
		1,580.6千円		1,340.6千円	1,390.6千円	— 千円	— 千円	— 千円	林学専攻 (D) 農業工学専攻 (D)		
		1,540.6千円		1,300.6千円	1,350.6千円	— 千円	— 千円	— 千円	造園学専攻 (D)		
学 生 納 付 金 以 外 の 維 持 方 法 の 概 要			私立大学等経常費補助金収入、寄付金収入、手数料収入 等								

大学等の名称	東京農業大学大学院								所在地	
	修業年限	入学定員	編入学員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
既設大学等の状況	農学研究科 博士前期課程	年	人	年次人	人		0.95			
	農学専攻	2	14	—	28	修士（農学）	0.96	昭和28年度	神奈川県厚木市船子1737番地	
	畜産学専攻	2	12	—	24	修士（畜産学）	1.16	昭和61年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	2	10	—	20	修士（バイオセラピー学）	0.55	平成22年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	2	30	—	60	修士（バイオサイエンス）	1.13	平成14年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号	令和3年4月学生募集停止
	農芸化学専攻	2	—	—	—	修士（農芸化学）	—	昭和32年度	同上	令和2年4月学生募集停止
	醸造学専攻	2	—	—	—	修士（醸造学）	—	平成2年度	同上	令和2年4月学生募集停止
	食品栄養学専攻	2	—	—	—	修士（食品栄養学）	—	昭和61年度	同上	令和2年4月学生募集停止
	林学専攻	2	12	—	24	修士（林学）	0.66	昭和61年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	農業工学専攻	2	8	—	16	修士（農業工学）	0.81	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	造園学専攻	2	12	—	24	修士（造園学）	0.79	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	国際農業開発学専攻	2	12	—	24	修士（国際農業開発学）	1.70	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	農業経済学専攻	2	10	—	20	修士（農業経済学）	0.75	昭和28年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	国際バイオビジネス学専攻	2	12	—	24	修士（国際バイオビジネス学）	0.66	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止
	修士課程									
	食品安全健康学専攻	2	—	—	—	修士（食品安全健康学）	—	平成30年度	同上	令和2年4月学生募集停止
	農学研究科 博士後期課程						0.61			
	農学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.46	昭和37年度	神奈川県厚木市船子1737番地	
	畜産学専攻	3	4	—	12	博士（畜産学）	0.41	平成2年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	3	3	—	9	博士（バイオセラピー学）	0.55	平成24年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	3	6	—	18	博士（バイオサイエンス）	0.71	平成16年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号	令和3年4月学生募集停止
	農芸化学専攻	3	—	—	—	博士（農芸化学）	—	昭和34年度	同上	令和2年4月より学生募集停止
	醸造学専攻	3	—	—	—	博士（醸造学）	—	平成14年度	同上	令和2年4月より学生募集停止
食品栄養学専攻	3	—	—	—	博士（食品栄養学）	—	平成14年度	同上	令和2年4月より学生募集停止	
林学専攻	3	4	—	12	博士（林学）	0.25	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
農業工学専攻	3	2	—	6	博士（農業工学）	1.50	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
造園学専攻	3	3	—	9	博士（造園学）	0.33	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士（国際農業開発学）	1.66	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
農業経済学専攻	3	5	—	15	博士（農業経済学）	0.33	昭和37年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
国際バイオビジネス学専攻	3	5	—	15	博士（国際バイオビジネス学）	0.33	平成16年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
環境共生学専攻	3	5	—	15	博士（環境共生学）	0.86	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止	

既設大学等の状況	応用生物科学研究科 博士前期課程						1.03		
	農芸化学専攻	2	30	—	60	修士（農学）	1.03	令和2年度	東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号
	醸造学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	1.15	令和2年度	同上
	食品安全健康学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	0.85	令和2年度	同上
	食品栄養学専攻	2	6	—	12	修士（農学）	1.33	令和2年度	同上
	応用生物科学研究科 博士後期課程						0.33		
	農芸化学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.40	令和2年度	東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号
	醸造学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.50	令和2年度	同上
	食品安全健康学専攻	3	3	—	9	博士（農学）	0.00	令和2年度	同上
	食品栄養学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.50	令和2年度	同上
	生物産業学研究科 博士前期課程						1.17		
	生物生産学専攻	2	7	—	14	修士（生物産業学）	0.99	平成22年度	北海道網走市八坂196 番地
	アクアバイオ学専攻	2	5	—	10	修士（生物産業学）	1.40	平成22年度	同上
	食品香粧学専攻	2	5	—	10	修士（生物産業学）	1.60	平成22年度	同上
	産業経営学専攻	2	3	—	6	修士（経営学）	0.49	平成22年度	同上
	生物産業学研究科 博士後期課程						0.58		
	生物産業学専攻	3	8	—	24	博士（生物産業学又は経営学）	0.58	平成7年度	同上

大学等の名称	東京農業大学								所在地
	修業年限	入学定員	編入学員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
農学部	年	人	年次人	人		倍		神奈川県厚木市船子1737番地	
農学科	4	170	—	730	学士（農学）	1.07	昭和24年度	同上	
動物科学科	4	140	—	600	学士（農学）	1.05	昭和24年度	同上	
生物資源開発学科	4	125	—	375	学士（農学）	1.05	平成30年度	同上	
デザイン農学科	4	123	—	369	学士（農学）	1.03	平成30年度	同上	
バイオセラピー学科	4	—	—	—	学士（農学）	—	平成18年度	同上	
応用生物科学部						1.05		東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号	
農芸化学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.06	平成10年度	同上	
醸造科学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.05	平成10年度	同上	
食品安全健康学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.04	平成26年度	同上	
栄養科学科	4	120	—	480	学士（応用生物科学）	1.04	平成10年度	同上	
生命科学部						1.05			
バイオサイエンス学科	4	150	—	590	学士（農学）	1.05	平成29年度	同上	
分子生命化学科	4	130	—	505	学士（農学）	1.04	平成29年度	同上	
分子微生物学科	4	130	—	505	学士（農学）	1.06	平成29年度	同上	
地域環境科学部						1.04			
森林総合科学科	4	130	—	510	学士（地域環境科学）	1.05	平成10年度	同上	
生産環境工学科	4	130	—	510	学士（地域環境科学）	1.04	平成10年度	同上	
造園科学科	4	130	—	510	学士（地域環境科学）	1.04	平成10年度	同上	
地域創成科学科	4	100	—	380	学士（農学）	1.05	平成29年度	同上	
国際食料情報学部						1.05			
国際農業開発学科	4	150	—	590	学士（国際食料情報学）	1.04	平成10年度	同上	
食料環境経済学科	4	190	—	750	学士（国際食料情報学）	1.05	平成10年度	同上	
国際バイオビジネス学科	4	150	—	590	学士（国際食料情報学）	1.05	平成10年度	同上	
国際食農科学科	4	110	—	430	学士（農学）	1.05	平成29年度	同上	
生物産業学部						1.06		北海道網走市八坂196番地	
北方圏農学科	4	91	—	401	学士（農学）	1.07	平成元年度	同上	
海洋水産学科	4	91	—	331	学士（農学）	1.08	平成18年度	同上	
食香粧化学科	4	91	—	343	学士（農学）	1.01	平成元年度	同上	
自然資源経営学科	4	90	—	365	学士（経営学）	1.09	平成元年度	同上	

既設大学等の状況

平成30年度入学定員減（△50人）  
平成30年度入学定員減（△40人）  
平成30年より学生募集停止  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
平成30年度入学定員増（10人）  
令和2年度入学定員減（▲9）  
令和2年度編入学定員減（▲10）  
令和2年度入学定員増（11名）  
令和2年度入学定員増（11名）  
令和2年度編入学定員減（▲12）  
令和2年度編入学定員減（▲5）

既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	総合情報学部	年	人	年次人	人		倍		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地
	総合情報学科	4	400	3年次10	1,620	学士(総合情報学)	1.13	平成25年度	同上
看護学部								同上	
看護学科	4	100	—	400	学士(看護学)	0.93	平成29年度	同上	
既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学大学院							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	総合情報学研究科博士前期課程	年	人	年次人	人		倍		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地
	総合情報学専攻	2	15	—	30	修士(総合情報学)	0.40	平成4年度	同上
総合情報学研究科博士後期課程								同上	
総合情報学専攻	3	3	—	9	博士(総合情報学)	0.22	平成11年度	同上	
附属施設の概要	名称	目的						設置年月	
	1 図書館 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学生の学習・研究活動の支援施設						平成26年4月	
	農学部図書館 (神奈川県厚木市船子1737)	学生の学習・研究活動の支援施設						平成10年4月	
	生物産業学部図書館 (北海道網走市八坂196)	学生の学習・研究活動の支援施設						平成元年4月	
	2 農学部の附属施設								
	伊勢原農場 (神奈川県伊勢原市三ノ宮前畑1499-1 他(79,910,22㎡))	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習						平成24年4月	
	富士農場 (静岡県富士宮市麓422)	畜産実習を中心とした実習教育						昭和17年	
	植物園 (神奈川県厚木市船子1737)	有用植物の収集・保存・展示						昭和22年	
	生き物連携センター (神奈川県厚木市船子1737)	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究						平成19年4月	
	電子顕微鏡室 (神奈川県厚木市船子1737)	ウイルス・微生物等の微細構造解析						平成10年4月	
3 応用生物科学部の附属施設									
食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究						平成10年4月		
4 生命科学部の附属施設									
高次生命機能解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	遺伝子組換え、栄養、生理、遺伝、発生など生命科学分野の研究						平成21年4月		
5 地域環境科学部の附属施設									
奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137 (653,016.00㎡))	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等						昭和53年		
6 国際食料情報学部の附属施設									
宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2) (98,262.00㎡)	熱帯農業の実習教育・試験研究						昭和63年		
7 生物産業学部の附属施設									
網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8) (432,174.00㎡)	寒冷地大規模農場の実習教育						昭和57年		
オホーツク臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究 (4,656.60㎡)						平成18年4月		
8 農生命科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践						平成12年4月		
9 グローバル連携センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力連携						平成18年4月		
10 「食と農」の博物館 (東京都世田谷区上用賀2-4-28)	教育・研究の成果を広く社会に公開						平成16年4月		



教育課程等の概要														
(地域環境科学研究科 林学専攻 博士前期課程)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
地域環境科学研究科 共通科目	知的財産管理法	1前		2		○								兼1 集中
	インターンシップ	2前		2				○	8	6				集中
	小計（2科目）	—	0	4	0	—			8	6	0	0	0	兼1
専攻科目 基礎科目	研究倫理特講	1前	2			○			7					オムニバス
	論文英語	1前		2		○			8	6				兼1
	科学英語	1前		2		○								
	プレゼンテーション法	1前	2				○		8	6				オムニバス
	実験・調査計画法	1後	2			○			7					
	論文作成法	1前		2		○			8	6				集中
	フィールド調査	1前		2			○		8	6				
	森林生態学特講	1後		2		○			1	1				共同
	治山緑化学特講	1後		2		○			1					共同
	造林学特講	1後		2		○			1	1				
	森林療法学特講	1後		2		○			1					共同
	林業工学特講	1後		2		○			1					
	木材工学特講	1後		2		○			1	1				共同
	林産化学特講	1後		2		○			1					
	林政学特講	1後		2		○			1	1				共同
	森林経営学特講	1後		2		○			1	1				共同
小計（16科目）	—	6	26	0	—			8	6	0	0	0	兼1	
特論科目	森林環境保全学特論	1前		2		○			2	1				共同
	森林資源生産学特論	1前		2		○			2	1				共同
	森林資源利用学特論	1前		2		○			2	1				共同
	森林文化情報学特論	1前		2		○			2	2				共同
小計（4科目）	—	0	8	0	—			8	5	0	0	0	兼0	
研究科目	林学特別演習Ⅰ	1前	2				○		8	5				
	林学特別演習Ⅱ	1後	2				○		8	5				
	林学特別演習Ⅲ	2前	2				○		8	5				
	林学特別演習Ⅳ	2後	2				○		8	5				
	林学特別実験Ⅰ	1前	2					○	8	5				
	林学特別実験Ⅱ	1後	2					○	8	5				
	林学特別実験Ⅲ	2前	2					○	8	5				
	林学特別実験Ⅳ	2後	2					○	8	5				
小計（8科目）	—	16	0	0	—			8	5	0	0	0	兼0	
合計（30科目）			—	22	38	0	—		8	6	0	0	0	兼2
学位又は称号		修士（農学）		学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
<b>【修了要件】</b> 2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目22単位、選択必修科目4単位（基礎科目の特講の中から研究領域に関係の深い科目を1科目2単位及び特論科目の中から1科目2単位）、選択科目4単位以上の合計30単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期				
							1学期の授業期間			15週				
							1時限の授業時間			90分				

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教 育 課 程 等 の 概 要															
(地域環境科学研究科 農業工学専攻 博士前期課程)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
地域環境科学研究科 共通科目	知的財産管理法	1前		2		○								兼1	集中
	インターンシップ	2前		2				○	11	4		1			集中
	小計(2科目)	—	0	4	0	—			11	4	0	1	0	兼1	
専攻科目	研究倫理特講	1前	1			○			8	2					オムニバス・共同
	プレゼンテーション法	1後		1			○		11	4		1			
	フィールド調査	1前		1				○	11	4		1			
	論文作成法	1後		1		○			11	4		1			
	水利施設工学特講	1前		2		○			1	1		1			オムニバス
	海外農業開発学特講	1前		2		○			3						オムニバス
	土壌物理学特講	1後		2		○			3						オムニバス
	農村計画学特講	1後		2		○				1					
	農地環境学特講	1前		2		○			1	1					オムニバス
	土木材料学特講	1前		2		○			2						オムニバス
	バイオロボティクス特講	1後		2		○			3						オムニバス
	農産加工流通工学特講	1前		2		○			1	1					オムニバス
	広域環境情報学特講	1前		2		○			3	1					オムニバス
小計(13科目)	—	1	21	0	—			11	4	0	1	0	兼1		
特論科目	地域資源利用学特論Ⅰ	1前		2		○			1	1					オムニバス
	地域資源利用学特論Ⅱ	1後		2		○			1	1					オムニバス
	生産環境情報・計画学特論Ⅰ	1前		2		○			1						
	生産環境情報・計画学特論Ⅱ	1後		2		○			2						オムニバス
	施設工学特論Ⅰ	1前		2		○			2						オムニバス
	施設工学特論Ⅱ	1後		2		○			2						オムニバス
	農業生産システム工学特論Ⅰ	1前		2		○			3						オムニバス
	農業生産システム工学特論Ⅱ	1後		2		○			3						オムニバス
小計(8科目)	—	0	16	0	—			10	1	0	0	0	兼0		
研究科目	農業工学特別演習Ⅰ	1前	2				○		11	3					
	農業工学特別演習Ⅱ	1後	2				○		11	3					
	農業工学特別演習Ⅲ	2前	2				○		11	3					
	農業工学特別演習Ⅳ	2後	2				○		11	3					
	農業工学特別実験Ⅰ	1前	2					○	11	3					
	農業工学特別実験Ⅱ	1後	2					○	11	3					
	農業工学特別実験Ⅲ	2前	2					○	11	3					
	農業工学特別実験Ⅳ	2後	2					○	11	3					
小計(8科目)	—	16	0	0	—			11	3	0	0	0	兼0		
合計(31科目)			—	17	41	0	—		11	4	0	1	0	兼2	
学位又は称号		修士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<b>【修了要件】</b> 2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目17単位、選択必修科目6単位（基礎科目の特講の中から研究領域に関係の深い科目を1科目2単位及び特論科目の中から2科目4単位）、選択科目7単位以上の合計30単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要																
(地域環境科学研究科 造園学専攻 博士前期課程)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
地域環境科学研究科 研究科共通科目	知的財産管理法	1前		2		○									兼1 集中	
	インターンシップ	2前		2				○	7	4					集中	
	小計(2科目)	—	0	4	0	—			7	4	0	0	0		兼1	
専攻科目	基礎科目	研究倫理特講	1前	1			○			7						オムニバス
		論文英語	1後	1			○			7	4					
		造園調査法詳論	1前		2		○			7						オムニバス・共同・集中
		造園調査法詳論演習	1前		2			○			4					オムニバス・共同・集中
		日本庭園詳論	1後		2		○			1						
		観光計画詳論	2前		2		○				1					
		ランドスケープマネジメント詳論	1後		2		○			1						
		ランドスケープデザイン詳論	2前		2		○				1					
		樹芸詳論	1後		2		○				1					
		芝生詳論	2前		2		○			1						
		ランドスケープ空間情報詳論	2前		2		○			1						
	小計(11科目)	—	2	18	0	—			7	4	0	0	0		兼0	
	特論科目	造園計画・設計学特論	1前	2			○			2						オムニバス
		造園植物・植栽学特論	1前	2			○			3						オムニバス
造園施設材料・施工学特論		1前	2			○			2						オムニバス	
小計(3科目)		—	6	0	0	—			7	0	0	0	0		兼0	
研究科目	造園学特別演習Ⅰ	1前	4				○		7	3						
	造園学特別演習Ⅱ	1後	4				○		7	3						
	造園学特別演習Ⅲ	2前	4				○		7	3						
	造園学特別演習Ⅳ	2後	4				○		7	3						
	小計(4科目)	—	16	0	0	—			7	3	0	0	0		兼0	
合計(20科目)		—	24	22	0	—			7	4	0	0	0		兼1	
学位又は称号		修士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等									
<b>【修了要件】</b> 2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目24単位、選択必修科目2単位（基礎科目の詳論の中から研究領域に関係の深い科目を1科目2単位を選択）、選択科目4単位以上の合計30単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期						
							1学期の授業期間			15週						
							1時限の授業時間			90分						

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要															
(地域環境科学研究科 地域創成科学専攻 修士課程)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
地域環境科学 研究科 共通科目	知的財産管理法	1前		2		○									兼1 集中
	インターンシップ	2前		2				○	8	4					集中
	小計(2科目)	—	0	4	0	—			8	4	0	0	0		兼1
専攻科目	基礎科目	研究倫理特講	1前	1			○		6	1					オムニバス
		論文英語	1前	2			○		8	4					
		プレゼンテーション法	1前	1				○		8	4				
		実験・調査計画法	1前		2		○		8	4					
		地域経営政策論	1前		2		○		8	1					集中
		フィールド調査	1後		2		○		8	4					集中
		環境教育法	1後		2		○		3	1					オムニバス
	小計(7科目)	—	4	8	0	—			8	4	0	0	0		兼0
	特論科目	保全生態学特論Ⅰ	1前		2		○		2	1					共同
		保全生態学特論Ⅱ	1後		2		○		2	1					共同
地域環境保全学特論Ⅰ		1前		2		○		3	1					共同	
地域環境保全学特論Ⅱ		1後		2		○		3	1					共同	
地域環境工学特論Ⅰ		1前		2		○		3						共同	
地域環境工学特論Ⅱ		1後		2		○		3						共同	
地域デザイン学特論Ⅰ		1前		2		○		1	2					共同	
地域デザイン学特論Ⅱ		1後		2		○		1	2					共同	
小計(8科目)	—	0	16	0	—			8	4	0	0	0		兼0	
研究科目	地域創成科学特別演習Ⅰ	1前	2				○		8	4					
	地域創成科学特別演習Ⅱ	1後	2				○		8	4					
	地域創成科学特別演習Ⅲ	2前	2				○		8	4					
	地域創成科学特別演習Ⅳ	2後	2				○		8	4					
	地域創成科学特別実験Ⅰ	1前	2					○	8	4					
	地域創成科学特別実験Ⅱ	1後	2					○	8	4					
	地域創成科学特別実験Ⅲ	2前	2					○	8	4					
	地域創成科学特別実験Ⅳ	2後	2					○	8	4					
	小計(8科目)	—	16	0	0	—			8	4	0	0	0		兼0
合計(25科目)		—	20	28	0	—			8	4	0	0	0		兼1
学位又は称号		修士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<b>【修了要件】</b> 2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目20単位、選択必修科目4単位（特論科目の中から主たる研究領域を選択）、選択科目6単位以上の合計30単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要															
(地域環境科学研究科 林学専攻 博士後期課程)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
地域環境科学研究科 研究共通科目	研究倫理後期特講	1前	1			○									兼1
	インターンシップ	2前		2					○	8	5				集中
	小計(2科目)	—	1	2	0	—			8	5	0	0	0	兼1	
専攻科目 基礎科目	上級実験・調査計画法	1後	2			○				7					オムニバス
	小計(1科目)	—	2	0	0	—			7	0	0	0	0	兼0	
	森林環境保全学後期特論	1前		2		○				2	1				共同
	森林資源生産学後期特論	1前		2		○				2	1				共同
	森林資源利用学後期特論	1前		2		○				2	1				共同
専攻科目 特論科目	森林文化情報学後期特論	1前		2		○				2	2				共同
	小計(4科目)	—	0	8	0	—			8	5	0	0	0	兼0	
	特別研究指導Ⅰ	1通	4				○			8	5				
	特別研究指導Ⅱ	2通	4				○			8	5				
研究指導科	特別研究指導Ⅲ	3通	4				○			8	5				
	小計(3科目)	—	12	0	0	—			8	5	0	0	0		
	合計(10科目)	—	15	10	0	—			8	5	0	0	0	兼1	
学位又は称号		博士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<b>【修了要件】</b> 3年以上在学し、所定の授業科目について17単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目15単位、選択必修科目2単位（特論科目の中から主たる研究領域を選択）の合計17単位以上を修得すること。							1学年の学期区分				2期				
							1学期の授業期間				15週				
							1時限の授業時間				90分				

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要															
(地域環境科学研究科 農業工学専攻 博士後期課程)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
地域環境科学研究科 共通科目	研究倫理後期特講	1前	1			○								兼1	
	インターンシップ	2前		2					○	10	4		1	0	集中
	小計(2科目)	—	1	2	0				—	10	4	0	1	0	兼1
基礎科目 専攻科目 特論科目	英語論文作成法	1前	2			○				10	4		1		
	小計(1科目)	—	2	0	0				—	10	4	0	1	0	兼0
	地域資源利用工学特論	1前		2		○				1					共同 オムニバス
	農村環境工学特論	1後		2		○					1				
	広域環境情報学特論	1前		2		○				1					
	地水環境工学特論	1後		2		○				2					
	社会基盤工学特論	1前		2		○				1					
	水利施設工学特論	1後		2		○				1					
	バイオロボティクス特論	1前		2		○				2					
農産加工流通工学特論	1前		2		○				1						
小計(8科目)	—	0	16	0				—	9	1	0	0	0	兼0	
研究指導科	特別研究指導Ⅰ	1通	4					○		10	3				
	特別研究指導Ⅱ	2通	4					○		10	3				
	特別研究指導Ⅲ	3通	4					○		10	3				
	小計(3科目)	—	12	0	0			—		10	3	0	0	0	兼0
合計(14科目)		—	15	18	0			—		10	4	0	1	0	兼1
学位又は称号		博士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<b>【修了要件】</b> 3年以上在学し、所定の授業科目について17単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目15単位、選択必修科目2単位（特論科目の中から主たる研究領域を選択）の合計17単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

- (注)
- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
  - 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
  - 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
  - 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要														
(地域環境科学研究科 造園学専攻 博士後期課程)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
地域環境科学研究科 共通科目	研究倫理後期特講	1前	1			○								兼1
	インターンシップ	2前		2				○	7	4				集中
	小計(2科目)	—	1	2	0			—	7	4				兼1
専攻科目	基礎科目	論文英語作成	1前	2			○		7	4				
		小計(1科目)	—	2	0	0		—	7	4	0	0	0	兼0
	特論科目	造園計画学後期特論	1前		2		○		1	1				オムニバス
		造園設計学後期特論	1後		2		○		1	1				オムニバス
		造園植物学後期特論	1前		2		○		1	1				オムニバス
		造園植栽学後期特論	1後		2		○		2					オムニバス
		造園施設材料学後期特論	1前		2		○		1					
造園施工学後期特論	1後		2		○		1							
小計(6科目)	—	0	12	0		—	7	3	0	0	0	兼0		
研究指導科	特別研究指導Ⅰ	1通	4				○	7	3					
	特別研究指導Ⅱ	2通	4				○	7	3					
	特別研究指導Ⅲ	3通	4				○	7	3					
	小計(3科目)	—	12	0	0		—	7	3	0	0	0	兼0	
合計(12科目)		—	15	14	0		—	7	4	0	0	0	兼1	
学位又は称号		博士(農学)		学位又は学科の分野			農学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
<b>【修了要件】</b> 3年以上在学し、所定の授業科目について17単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。  <b>【履修方法】</b> 必修科目15単位、選択必修科目2単位（特論科目の中から主たる研究領域を選択）の合計17単位以上を修得すること。							1学年の学期区分			2期				
							1学期の授業期間			15週				
							1時限の授業時間			90分				

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

## 教育課程等の概要(基礎となる学部等)

(地域環境科学部 森林総合科学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
総合教育科目	導入科目	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			11	6		2				
		共通演習	1後	1				○		11	6		2				
		情報基礎(一)	1前	2				○									兼3
		情報基礎(二)	1後	2				○									兼3
	関係科目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1												兼2
		スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1												兼2
	課題別科目	特別講義(一)	1前		2			○									兼1
		特別講義(二)	1前		2			○									兼1
		特別講義(三)	1前		2			○									兼1
		特別講義(四)	1前		2			○									兼1
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○									兼13
	インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○									兼1	
	備就職目	キャリアデザイン	2前		1				○								兼1
		ビジネスマナー	2後		1				○								兼1
		インターンシップ	3後		1				○								兼1
	(小計15科目)	—	7	17	0		—		11	6	0	2	0			兼23	
学部共通科目	リメディア	基礎生物	1前			2	○									兼1	
		基礎化学	1前			2	○									兼1	
		基礎物理	1前			2	○									兼1	
		基礎数学	1前			2	○									兼1	
		文章表現	1前			2	○										兼1
	(小計5科目)	—	0	0	10		—		0	0	0	0	0			兼5	
外国語科目	全学共通科目	英語(一)	1前	2			○			1						兼4	
		英語(二)	1後	2			○			1						兼4	
		英語(三)	2前	2			○									兼5	
		英語(四)	2後	2			○									兼5	
	学部共通科目	実用英語科	英語リーディング	1前		2		○									兼3
		TOEIC英語初級	3前		2			○		1						兼2	
		TOEIC英語中級	3後		2			○								兼1	
		科学英語	3前		2			○								兼2	
	学部共通科目	初修外国語科	中国語(一)	1前		2		○									兼3
		中国語(二)	1後		2			○									兼3
ドイツ語(一)		1前		2			○									兼1	
ドイツ語(二)		1後		2			○									兼1	
	(小計12科目)	—	8	16	0		—		1	0	0	0	0			兼15	
学科基礎科目	人間関係	哲学	1前		2		○									兼1	
		科学の歴史	1後		2		○									兼1	
		文学概論	1後		2		○			1							
		技術者倫理	3前		2		○									兼1	
	社会関係	日本国憲法	2後		2		○										兼1
		地域と文化	2後		2		○										兼1
		現代社会と経済	3前		2		○										兼1
		国際関係と社会問題	3後		2		○										兼1
	自然関係	生物学	1前		2		○										兼1
		化学	1前		2		○										兼1
地学		1前		2		○										兼1	
物理学		1後		2		○										兼1	
統計学	2前		2		○										兼1		
	(小計13科目)	—	0	26	0		—		2	1	0	0	0			兼12	



通 専 門 目 共	地域環境科学概論	1前	2		○								兼11	オムニバス
	地球環境と炭素循環	1後		2	○				1				兼4	オムニバス
創 生 型 科 目	環境学習と体験活動	2前		2	○			1					兼2	オムニバス・ 共同(一部) ※実習
	源流文化学	2前		2	○								兼1	
	(小計4科目)	—	2	6	0	—		6	0	0	0	0	兼15	
専 門 基 礎 科 目	森林総合科学概論	1前	2		○			8	6		2			
	森林植物学	1前	2		○				1					
	測量学	1前	2		○				1					
	森林保全学	2前	2		○			1						
	造林学	2前	2		○			1						
	森林政策学	2前	2		○			1						
	森林生態学	2後	2		○			1	1					オムニバス
	林産化学	2前	2		○			1						
	木材工学	2前	2		○			1						
	林業工学	2後	2		○			1	1					オムニバス
	森林経営学	2後	2		○			1						
	(小計11科目)	—	22	0	0	—		8	6	0	2	0	兼0	
専 門 コ ア 科 目	木材組織学	1前		2	○			1			1			オムニバス
	森林文化論	1前		2	○			2	1		1			オムニバス
	森林地形地質学	1後		2	○			1					兼1	オムニバス
	樹木生理学	1後		2	○				1					
	木材物理学	1後		2	○			1			1			オムニバス
	森林情報学	1後		2	○				1					
	森林環境学	1後		2	○				1					
	森林立地学	2前		2	○			1	1					オムニバス
	きのこ学	2前		2	○			1						
	木材化学	2後		2	○					1				
	野生生物管理学	2後		2	○				1					
	樹病学	2後		2	○				1					
	森林情報演習	2後		1		○							兼1	
	林木育種学	2後		2		○							兼1	
	森林アメニティ学	2後		2		○			1					
	測樹学	2後		2		○								兼1
	森林教育学	2後		2		○			1					
	植生学	3前		2		○								兼1
	森林機械学	3前		2		○								兼1
	森林計画学	3前		2		○			1	1				
	森林水文学	3前		2		○				1				
	森林昆虫学	3前		2		○								兼1
	森林土壌学	3前		2		○					1			
	造林樹木学	3前		2		○			1	1				
	木質構造学	3前		2		○								兼1
	木材劣化生物学	3前		2		○			1					
	山村コミュニティー論	3前		2		○						1		
	緑化学	3後		2		○			1					
	木材保存化学	3後		2		○				1				
	森林環境経済学	3後		2		○						1		
	治山工学	3後		2		○								兼1
	森林土木実習	3後		2				○	1	1				
	森林作業システム学	3後		2		○			1					
	木質材料学	2後		2		○								兼1
	建築設計製図法	3後		2		○								兼1
	外書講読	4前		2		○			2					
	実験・調査計画法	4前		2		○								兼1
	(小計37科目)	—	0	73	0	—		11	5	0	2	0	兼11	
専 門 実 用 科 目	木材加工(製図及び実習を含む。)	2前		2	○								兼1	※実習
	金属加工(製図及び実習を含む。)	2後		2	○								兼1	※実習
	栽培(実習を含む。)	2前		2	○								兼2	共同※実習
	機械(実習を含む。)	3前		2	○								兼1	※実習
	電気(実習を含む。)	2後		2	○								兼1	※実習
	(小計5科目)	—	0	10	0	—		0	0	0	0	0	兼4	
城 学 科 際 目 録	木質バイオマス利用学	3前		2	○				1					
	(小計1科目)	—	0	2	0	—		0	1	0	0	0	兼0	

総合化科目	森林学実験実習 (一)	1前	2				○	5	3		1		
	森林学実験実習 (二)	1後	2				○	3	3		1		
	森林学実験実習 (三)	2前	2				○	3	3				
	森林学実験実習 (四)	2後	2				○	3	2		1		
	測量実習	2前	2				○	1	1				
	演習林実習 (一)	1前	1				○	3	2				
	演習林実習 (二)	2後	2				○	2	1				
	専攻実験・実習 (一)	3前	2				○	10	6		2		
	専攻実験・実習 (二)	3後	2				○	10	6		2		
	卒業論文	4通	4				○	10	6		2		
	(小計10科目)	—	21	0	0	—	—	10	6	0	2	0	兼0
(合計113科目)		—	60	148	10	—	—	11	6	0	2	0	兼78
学位又は称号	学士 (地域環境科学)	学位又は学科の分野				農学分野							
卒業要件及び履修方法						授業期間等							
必修科目60単位、選択必修科目12単位 (人間関係科目の中から4単位、社会関係科目の中から4単位、自然関係科目の中から4単位)、選択科目52単位以上 (ただし、学科専門科目の中から30単位以上) を修得し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録の上限: 44単位 (年間))						1 学年の学期区分		2 期					
						1 学期の授業期間		1 5 週					
						1 時限の授業時間		9 0 分					

(注)

- 1 学部等, 研究科等若しくは高等専門学校等の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には, 授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等, 研究科等若しくは高等専門学校等の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合, 大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は, この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて, 適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には, 実技も含むこと。

教育課程等の概要 (基礎となる学部等)

(地域環境科学部 生産環境工学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導入科目	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			3	1		2			
		共通演習	1後	1				○		12	3		3			
		情報基礎 (一)	1前	2			○			3	1		1			兼1
		情報基礎 (二)	1後	2			○			3			1			兼1
	関係科目	スポーツ・レクリエーション (一)	1前		1				○							兼2
		スポーツ・レクリエーション (二)	1後		1				○							兼2
	課題別科目	特別講義 (一)	1前		2		○									兼1
		特別講義 (二)	1前		2		○									兼1
		特別講義 (三)	1前		2		○									兼1
		特別講義 (四)	1前		2		○									兼1
		インターナショナル・スタディーズ (一)	1前		2		○			2						兼11
	インターナショナル・スタディーズ (二)	1後		2		○									兼1	
	備就職目	キャリアデザイン	2前		1				○		1					
		ビジネスマナー	2後		1				○		1					
		インターンシップ	3後		1				○		1					集中
	(小計15科目)	—	7	17	0	—	—	—	12	4	0	3	0		兼18	
学部共通科目	ルリメデア	基礎生物	1前			2	○									兼1
		基礎化学	1前			2	○									兼1
		基礎物理	1前			2	○									兼1
		基礎数学	1前			2	○									兼1
		文章表現	1前			2	○									兼1
	(小計5科目)	—	0	0	10	—	—	—	0	0	0	0	0		兼5	
外国語科目	全学共通科目	英語 (一)	1前	2			○									兼5
		英語 (二)	1後	2			○									兼5
		英語 (三)	2前	2			○									兼5
		英語 (四)	2後	2			○									兼5
	学部共通科目	実用英語科	英語リーディング	1前		2		○								兼3
		TOEIC英語初級	3前		2		○									兼3
		TOEIC英語中級	3後		2		○									兼1
		科学英語	3前		2		○									兼2
	学部共通科目	初修外国語科	中国語 (一)	1前		2		○								兼3
		中国語 (二)	1後		2		○									兼3
ドイツ語 (一)		1前		2		○									兼1	
ドイツ語 (二)		1後		2		○									兼1	
	(小計12科目)	—	8	16	0	—	—	—	0	0	0	0	0		兼18	
学科基礎科目	人間関係	哲学	1前		2		○									兼1
		科学の歴史	1後		2		○									兼1
		文学概論	1後		2		○									兼1
		技術者倫理	3前		2		○			1						兼1
	社会関係	日本国憲法	2後		2		○									兼1
		地域と文化	2後		2		○									兼1
		現代社会と経済	3前		2		○									兼1
		国際関係と社会問題	3後		2		○									兼1
	自然関係	生物学	1前		2		○									兼1
		化学	1前		2		○									兼1
地学		1前		2		○									兼1	
物理学		1後		2		○									兼1	
統計学	2前		2		○									兼1		
	(小計13科目)	—	0	26	0	—	—	—	1	0	0	0	0		兼13	

通 専 科 目 共	地域環境科学概論	1前	2			○			1					兼10	オムニバス
	地球環境と炭素循環	1後		2		○			1					兼3	オムニバス
創 生 型 科 目	環境学習と体験活動	2前		2		○			1					兼2	オムニバス・ 共同（一部） ※実習
	源流文化学	2前		2		○								兼1	※実習
	(小計4科目)	—	2	6	0	—			2	0	0	0	0	兼15	
専 門 基 礎 科 目	生産環境工学概論	1前	2			○			11	4		1		兼1	オムニバス
	数学	1前	2			○			1					兼1	オムニバス
	数学演習	1前	2				○		1					兼1	オムニバス
	基礎力学	1後	2			○			2			1			オムニバス
	基礎力学演習	1後	2				○		2			1			オムニバス
	材料力学	1後	2			○			1						
	熱力学	1後	2			○			1						
	応用数学	1後	2			○			1					兼1	
	応用数学演習	1後	2				○		1					兼1	
	測量学	2前	2			○				1					
	測量実習	2前	2					○	2	3		1		兼2	共同（一部）
	生産環境工学基礎演習	1前	1				○		11	4		3			
	応用測量学	2後	2			○			1	1				兼1	
	基礎実験	2後	2					○	11	4		3			
	(小計14科目)	—	27	0	0	—			12	4	0	3	0	兼3	
専 門 教 育 科 目	地域資源利用工学	2前		2		○			1						
	地形地質学	2前		2		○								兼1	
	地域環境保全学	2後		2		○			1						
	農地環境工学	3前		2		○				1		1			オムニバス
	農村計画学	3後		2		○				1					
	農村環境工学	3前		2		○				1		1			オムニバス
	土地改良学	3後		2		○				1					
	国土防災工学	3後		2		○			1					兼1	オムニバス
	海外農業開発工学	4前		2		○			2					兼1	オムニバス
	資源管理制度論	4前		2		○				1				兼1	オムニバス
	環境土壌物理学	2前	2			○			1						
	土質力学	2後	2			○			1						
	土質力学演習	2後	2				○		1						
	環境気象学	1後		2		○			1						
	情報処理工学	2後		2		○			2	1					オムニバス
	環境物理学	3前		2		○			1						
	流域水文学	3前		2		○			1						
	広域環境情報学	3前		2		○			1	1				兼1	オムニバス
	地下水環境工学	3後		2		○			1						
	環境リモートセンシング工学	3後		2		○			1						
	構造力学	2前	2			○			1						
	構造力学演習	2前	2				○		1						
	水理学	2後	2			○			1			1			オムニバス
	水理学演習	2後	2				○		1			1			オムニバス
	土木材料学	2前		2		○								兼1	
	鉄筋コンクリート工学	2後		2		○			1						
	社会基盤工学	3前		2		○			1						
	土木施工法	3前		2		○								兼1	
	水利施設工学	3前		2		○			1			1			オムニバス
	環境土木学	3後		2		○			1			1		兼1	オムニバス
	河川工学	4前		2		○								兼1	
	エネルギー工学	2前		2		○			2						オムニバス
	生産機械情報工学	2前		2		○			1						
	機械力学	2後		2		○				1					
	電気・電子工学	2後		2		○								兼1	
	食品工学	2後		2		○			1					兼1	オムニバス
	計測・制御工学	3前		2		○			1	1					
	農業・建設機械学	3前		2		○			1						
	農産加工流通工学	3前		2		○			2	1					オムニバス
	設計製図	3後		2		○			1						
	バイオロボティクス	3後		2		○			2						オムニバス
	(小計41科目)	—	14	68	0	—			11	4	0	2	0	兼10	

専門 実用 科目	木材加工（製図及び実習を含む。）	2前		2		○								兼1	※実習
	金属加工（製図及び実習を含む。）	2後		2		○								兼1	※実習
	栽培（実習を含む。）	2前		2		○								兼1	※実習
	機械（実習を含む。）	3前		2		○								兼1	※実習
	電気（実習を含む。）	2後		2		○								兼1	※実習
	（小計5科目）	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	兼4	
域学 科際 目録	土と水の環境	1後		2		○			3	1		1			
	作物栽培学	2後		2		○								兼1	
	（小計1科目）	—	0	2	0	—			3	1	0	1	0	兼1	
総合 化科 目	専攻実験	3前	2				○		11	4		3		兼2	
	専攻演習（一）	3後	2			○			11	3		3		兼1	
	専攻演習（二）	4前	2			○			12	4		3			
	専攻演習（三）	4後	2			○			12	4		3			
	卒業論文	4通	4			○			12	4		2			
	生産環境工学特別演習	3通	2			○			11	4		3			
	（小計6科目）	—	14	0	0	—			12	4	0	3	0	兼3	
	（合計116科目）	—	72	143	10	—			12	4	0	3	0	兼81	
学位又は称号		学士（地域環境科学）			学位又は学科の分野			農学分野							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
必修科目70単位、選択必修科目12単位（人間関係科目の中から4単位、社会関係科目の中から4単位、自然関係科目の中から4単位）、選択科目42単位以上（ただし、学科専門科目の中から20単位以上）を修得し、合計124単位以上を修得すること。（履修科目の登録の上限：44単位（年間））							1学年の学期区分			2期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

（注）

- 1 学部等，研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には，授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等，研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて，適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には，実技も含むこと。

教育課程等の概要（基礎となる学部等）

（地域環境科学部 造園科学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導入科目	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			9	4			3		
		共通演習	1後	1				○		9	5			3		
		情報基礎（一）	1前	2			○									兼3
		情報基礎（二）	1後	2			○									兼3
	関係科目	スポーツ・レクリエーション（一）	1前		1				○	1						兼1
		スポーツ・レクリエーション（二）	1後		1				○	1						兼1
	課題別科目	特別講義（一）	1前		2		○									兼1
		特別講義（二）	1前		2		○									兼1
		特別講義（三）	1前		2		○									兼1
		特別講義（四）	1前		2		○									兼1
		インターナショナル・スタディーズ（一）	1前		2		○			1						兼12
	備就職目	キャリアデザイン	2前		1				○							兼1
		ビジネスマナー	2後		1				○							兼1
		インターンシップ	3後		1				○							兼1
		(小計15科目)	—	7	17	0	—	—	—	9	5	0	3	0		兼21
学部共通科目	ルリメデア	基礎生物	1前			2	○									兼1
		基礎化学	1前			2	○									兼1
		基礎物理	1前			2	○									兼1
		基礎数学	1前			2	○									兼1
		文章表現	1前			2	○									兼1
	(小計5科目)	—	0	0	10	—	—	—	0	0	0	0	0		兼5	
外国語科目	全学共通科目	英語（一）	1前	2			○									兼5
		英語（二）	1後	2			○									兼5
		英語（三）	2前	2			○									兼5
		英語（四）	2後	2			○									兼5
	学部共通科目	実用英語科	英語リーディング	1前		2		○								兼3
		TOEIC英語初級	3前		2		○									兼3
		TOEIC英語中級	3後		2		○									兼1
		科学英語	3前		2		○									兼2
	学部共通科目	初修外国語科	中国語（一）	1前		2		○								兼3
		中国語（二）	1後		2		○									兼3
ドイツ語（一）		1前		2		○									兼1	
ドイツ語（二）		1後		2		○									兼1	
	(小計12科目)	—	8	16	0	—	—	—							兼16	
学科基礎科目	人間関係	哲学	1前		2		○									兼1
		科学の歴史	1後		2		○									兼1
		文学概論	1後		2		○									兼1
		技術者倫理	3前		2		○			3						オムニバス
	社会関係	日本国憲法	2後		2		○									兼1
		地域と文化	2後		2		○									兼1
		現代社会と経済	3前		2		○									兼1
		国際関係と社会問題	3後		2		○									兼1
	自然関係	生物学	1前		2		○				1		1			兼1
		化学	1前		2		○									兼1
地学		1前		2		○									兼1	
物理学		1後		2		○									兼1	
統計学	2前		2		○									兼1		
	(小計13科目)	—	0	26	0	—	—	—	3	1	0	1	0		兼11	

通 専 科 目 共	地域環境科学概論	1前	2			○								兼11	オムニバス
	地球環境と炭素循環	1後		2		○								兼4	オムニバス
創 生 型 科 目	環境学習と体験活動	2前		2		○					1			兼2	オムニバス・ 共同（一 ※実習
	源流文化学	2前		2		○								兼1	
	(小計4科目)	—	2	6	0	—			0	0	0	1	0	兼4	
専 門 基 礎 科 目	造園科学概論	1前	2			○			3						オムニバス
	造園体験演習	1前	2				○		4	4		3		兼6	共同（一部）
	環境デザイン基礎演習	1後	2				○			3					共同
	花・緑演習	1後	2				○		4	1		1			共同
	測量実習	2前	2					○	1			1			共同
	CAD及びGIS基礎演習	2前		2			○		1	1				兼1	共同
	緑の経済論	2前		2			○							兼1	
	ランドスケープ作品論	2前		2			○				1				
(小計8科目)	—	10	6	0	—			6	5	0	3	0	兼8		
専 門 コ ア 科 目	造園計画学	2前	2			○			1	1					オムニバス
	近代造園史	2後	2			○			1	1					オムニバス
	都市緑地計画学	3前	2			○				1					
	風景地計画学	3前	2			○						1			
	日本庭園論	3前	2			○			1						
	景観論	1後		2		○					1				
	ランドスケープデザイン論	2後		2		○					1				
	公園マネージメント論	3前		2		○			1	1					オムニバス
	自然保護論	3後		2		○						1			
	観光計画学	3後		2		○								兼1	
	都市および農村計画	3後		2		○					1				
	ランドスケープ政策論	3後		2		○			1	1					オムニバス
	植物の生活と活用	1後	2			○			1						
	造園樹木学	1後	2			○								兼1	
	グラウンドカバープランツ	2前	2			○			1			1			オムニバス
	緑地生態学	2後	2			○			1	1					オムニバス
	造園植栽学	2後	2			○			1			1			オムニバス
	芝生論	3前		2		○			1						
	植栽基盤論	3前		2		○			1						
	樹木の保護と管理	3後		2		○								兼2	
	緑地の生きもの	3後		2		○								兼1	
	造園工学基礎演習	2前	2				○		2			1			共同
	測量学	2前	2			○			1						
	造園施設材料	2後	2			○					1		1		オムニバス
	造園工学	3前	2			○			1			1			オムニバス
	造園施工論	3後	2			○			1					兼1	オムニバス
	造園施設設計	3後		2		○			1						
(小計27科目)	—	30	24	0	—			8	5	0	3	0	兼6		
学 際 領 域 科 目	専門特化演習（一）（植物学）	4前		2		○			1	1					
	専門特化演習（一）（都市緑化）	4前		2		○			1			1			
	専門特化演習（一）（自然再生）	4前		2		○			1			1			
	専門特化演習（一）（環境デザイン）	4前		2		○				2				兼2	
	専門特化演習（二）（植栽基盤）	4後		2		○			2	1					
	専門特化演習（二）（建築デザイン）	4後		2		○			1	1				兼1	
	専門特化演習（二）（エンジニア）	4後		2		○			1			1		兼1	
	専門特化演習（二）（伝統技法）	4後		2		○			1					兼2	
(小計8科目)	—	0	16	0	—			7	4	0	3	0	兼6		

総合 化科 目	造園植栽演習	2後	4			○		5	1		2		兼2 兼2
	造園工学演習	3前	4			○		3	2		1		
	造園総合演習	3後	4			○		1	3				
	専攻研究	3後	2			○		9	5		3		
	造園総合論	4後	2			○		1					
	卒業論文(卒業制作)	4通	4			○		9	5		3		
(小計6科目)		—	20	0	0	—		9	5	0	3	0	兼4
(合計98科目)		—	77	111	10	—		9	5	0	3	0	兼85
学位又は称号		学士(農学)		学位又は学科の分野			農学分野						
卒業要件及び履修方法						授業期間等							
必修科目77単位、選択必修科目20単位(人間関係科目の中から4単位、社会関係科目の中から4単位、自然関係科目の中から4単位、専門特化演習の中から4単位)、選択科目27単位以上(ただし、学科専門科目の中から6単位以上)を修得し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録の上限:44単位(年間))						1学年の学期区分			2期				
						1学期の授業期間			15週				
						1時限の授業時間			90分				

(注)

- 1 学部等, 研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には, 授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等, 研究科等若しくは高等専門学校等の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合, 大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は, この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて, 適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には, 実技も含むこと。



授 業 科 目 の 概 要			
(地域環境科学研究科 林学専攻 博士前期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域環境科学研究科 共通科目	知的財産管理法	近年、農業分野および地域環境科学分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい価値を創造しようとする機運が高まっている。しかしながら、知的財産に関する法律は複雑で敷居が高く、独学での習得は困難である。そこで、日頃から農業系知財を専門としている現役弁理士が、事例を多く交えながらわかりやすく知的財産を解説する。 知的財産制度の概要を学修することにより知的財産の可能性を理解する。	
	インターンシップ	インターンシップとは、将来のキャリアに関連した地域環境科学に関わる職の経験を積むために、省庁、地方公共団体、企業や団体組織において、労働に従事することを指す。このインターンシップによって実社会での職業訓練を経験し、コミュニケーションや実務処理に係る能力とともに社会人としての資質の向上を獲得すること、併せて各々のキャリア設計を行い就職活動に役立てることを目標とする。	
専攻科目 基礎科目	研究倫理特講	(概要) 研究を実施し成果を公表する研究者は、得られた結果に責任をもち、適正な結果を伝える必要がある。この特講では、倫理とともにコンプライアンスを含めて各専門性を有する指導教員が様々な視点から、それぞれの研究分野における注意点を列挙しながら研究者としての倫理観を涵養することを目的とする。また、競争的資金などの申請や適正使用を見据えて研究倫理管理についても解説し、理解させることを目的とする。  (オムニバス方式/全15回：単位認定者 3 江口 文陽) (2 上原 巖/2回) 森林療法研究におけるプライバシー保護や実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  (3 江口 文陽/3回) 研究倫理に関する概論に関して講義し、研究記録(ノートの記録)、研究費の適正使用、研究報告の適正な標記、利益相反のルール、研究不正(改ざん・ねつ造・盗用など)が起こる背景とその防止法、研究成果の評価方法の在り方などを教授する。  (4 大林 宏也/2回) 木材理学・木材工学研究における実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  (5 佐藤 孝吉/2回) 林業経営学・測樹学研究における実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  (6 関岡 東生/2回) 林政学研究における実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  (7 橘 隆一/2回) 治山緑化工学研究における実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  (9 山崎 晃司/2回) 森林生態学研究における実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。さらに野生動物の生命倫理に関する国内外の条約・法規について教授する。	オムニバス方式
	論文英語	林学・林産学分野で読むべき論文英語は、その対象が植物、動物、微生物などの生物はもとより、環境学、経済学、政策学など多岐にわたる。指導教員による指導内容および関連分野の英語の読解とともに、英語論文の作成に至る過程を重視して指導する。授業のねらいは英語論文の投稿であり、学会発表や論文投稿を教育目標として幅広い科学分野の論文英語リーディングスキル向上を目指した学修を実施する。スキル向上によって科学論文を迅速かつ正確に読み解く能力を養う。	

専攻科目	基礎科目	科学英語	科学論文(NatureやNew Scientistなどのレベル)を、辞書と文法書を使えば、読み、理解することができるような、柔軟な語学力の養成をめざす。講義の具体的内容は、林学・林産学関連の文献を、輪読形式で読み、説明や要約を求めることが中心となる。その際、文章の形式や専門用語などの使用法にも留意して、林学・林産学のエキスパートとして遜色のない英語力を身につけてもらえるよう考慮する。科学英語という特別な英語があるわけではないが、英語の基礎力(特に単語力と構文力)を確実に自分のものにする事を日々心がけてもらうことを意識させる。	
		プレゼンテーション法	研究発表(オーラルもしくはポスター)の方法を習熟させることを目的とする。所定時間、あるいは所定枠内に簡潔にまとめる能力、理解されやすい発表の組み立て方、図や表のわかりやすい表記の仕方を十分に習熟させ、聴衆に理解してもらえるようなプレゼンテーションが行えるように指導する。本人による研究発表が目標となるが、年に一度の専攻内での中間発表会や研究室での定期的な発表会をプレゼンテーション法のスキルアップにつなげるよう教授する。	
		実験・調査計画法	(概要) 実験・調査計画法では、効率のよい実験方法をデザインし、結果を適切に解析することを目的とした統計学の応用分野としての観点から研究成果の科学的解析手法の修得を目的として講義する。農林学系の試験の着想から基礎研究・応用研究へのプロトコールづくりを充実させ、学術的な発表スキルや科学論文の執筆におけるスキルアップを目指す。自然科学や社会科学へ広く応用可能な講義内容をオムニバス形式で展開する。  (オムニバス方式/全15回:単位認定者 9 山崎 晃司) (2 上原 巖/2回) 造林学や森林療学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (3 江口 文陽/2回) 林産化学やきのこ学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (4 大林 宏也/2回) 木材理学・木材工学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (5 佐藤 孝吉/2回) 林業経営学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (6 関岡 東生/2回) 林政学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (7 橘 隆一/2回) 治山緑化工学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。  (9 山崎 晃司/3回) 森林生態学およびその他林学の研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。	オムニバス方式
		論文作成法	論文を書く目的は、自らのテーマと向き合い、結果を考察する経験をするところにある。各自の研究分野やテーマに合った論文の形式を理解し論文をどう書くかを教授する。さらに論文の構成を明確に把握することで「どう書くか」といったパターンだけでなく「なぜ論文の書き方にはルールがあるのか」を理解させ、それぞれの専門分野の課題に対応できるように解説する。	
		フィールド調査	フィールド調査を連続した日数で集中的に行なうことにより、フィールドに合わせた調査法を習熟する。また、フィールド調査に必要な知識を習得する。フィールドは奥多摩演習林、群馬分収林、富士農場のほか調査に必要な国内外に設定して森林や森林と関係する環境でのデータ収集について学修する。フィールド調査は自分たちだけで完結するものではなく、必然的に現地の社会や人々との色々な接触を伴うことから、相手への様々な配慮も必要となる。ここではフィールド調査の様々な技法について解説する。さらに演習による調査法の習得も目標とする。	

専攻科目 基礎科目	森林生態学特講	森林生態学に関する総合的な研究能力を養うために、植物生態学、生態系生態学、動物生態学についての専門知識を理解できるように教授する。そのために、各専門に関する授業、文献レビュー、学生自身の研究に関する発表なども取り入れ幅広い専門的な知識が習得できるように教授する。	共同
	治山緑化学特講	生物多様性保全、災害防止、土壌保全、水資源涵養、気象環境緩和など、森林が持つ多様な環境保全機能と、土砂災害が頻発するわが国の自然環境に関する理解を深め、災害跡地や開発地などの自然回復緑化、災害危険地域における防災林造成など、生物多様性の保全に配慮した自然生態系の早期回復技術、防災的に強い森林や将来を見越した水資源管理が可能な森林の再生・保全技術についての専門的知識を会得するとともに、最新の現地情報などを活用して現場技術者などとしての実践能力を高めることを目的とする。	
	造林学特講	造林学とは、樹木・林木の特性および森林の特性を考究し、その考究に基づいた森林造成、維持、管理技術を構築する学問体系およびその技術体系のことである。また、森林と造林学を考えることは、究極的に森林と人間との関わりについて考究することにも帰結しており、ここに今日の造林学の大きな意義がある。造林学にかかわる諸分野には、森林生態学、森林気象学、樹木生理学、森林土壌学、林木育種学、生化学、物理学、地学、社会学などがあげられ、それらが有機的に連関し、体系を形成している。これらの造林学の概要を学び、新たな造林学の側面、先端を導き出していくことを本授業の目標とする。	共同
	森林療法学特講	「森林療法」とは、森林環境を利用したりハビリテーション、カウンセリング、療育、作業療法、代替療法など、森林を総合的に活用した健康増進および福祉医療を含むところを指し、各地域においてその発展が期待されている。本論では、そうした森林環境の持つ健康増進や精神・心理面、また福祉、医療分野における効用を活用した森林療法について、国内外の事例を取り上げながら考察し、今後の地域社会における森林療法の可能性や、その効果の発揮できる森林環境のあり方について学ぶことを目的とする。	
	林業工学特講	林業工学は、森林の造成にかかわる様々な森林作業や森林資源を利用していくための木材収穫及び森林から川下の市場までの林産物の輸送に至る諸工程に関する分野を研究対象としており、人間生活や社会と密着した学問である。林業工学の柱となる領域として森林作業に用いられる機械に関する領域、森林作業計画・技術に関する領域、森林路網の設計・施工・配置に関する領域があげられる。林業工学特論ではこれら3つの領域の知識を深化させるための授業を行うことにより、森林作業の機械化、合理的な森林作業、森林路網の在り方を総合的に考察できる能力を修得することを目的とする。これらを通して森林作業の効率化や安全化に向けた作業体系の構築に資する能力を有することができる。	
	木材工学特講	木材工学分野に関連した木材組織学、材料力学、木材理学、木材物理学などの専門的な知識と技術を習得できるように教授する。論文の理解・作製に必要な専門性を習得するために、和文論文と英語論文の講読も実施して国内外の当該研究についての最先端の学術成果と学理について教授する。	共同
	林産化学特講	森林から生産される資源は、木材などの林産物にとどまらず特用林産物(きのこや山菜)など多岐にわたる。木材資源は持続可能な循環物質として私たちの生活と密接な関係を持っている。木材を長く健全な状況で利用することは森林破壊のみならず廃棄物減量の側面からも環境への負荷を軽減する。木材の高度利用技術、木材の構成成分を利用したパルプ製紙資源、精油成分、炭、きのこ、山菜などの森林資源の利用技術について学ぶ。さらに林産資源の二次的代謝産物は創薬や創食として新規物質発見と利用に関する可能性も秘めており、その科学的な学理と利用技術について修得することを目的として教授する。	
	林政学特講	林政学の学問範囲とその役割、及び森林・林業・林産業及び山村問題の現状について学ぶ。森林・林業・林産業・山村の現状理解とその問題点と政策的解決手段等について考えることを目的とする。まず、森林資源の現状、森林や林業資本の動向、産業としての林業や社会資本としての森林等と国民経済との関係を理解する。さらに、地球レベルでの森林利用とわが国における森林利用の特徴について、国民経済とのかかわりで理解する。 また、将来における森林整備のあり方や地域（ローカル）での森林・林業資本のあり方について理解することを目的として教授する。	共同
	森林経営学特講	森林経営学特論は、GISなどを活用した森林の空間デザイン、森林経営の歴史や現状、森林経営を活かす木材の生産・流通・消費についての理論と研究の視点について講義し、さらに、現地調査やその取りまとめにより、森林経営の基本理念や課題について、個々の課題を中心に学修する。森林経営の現状と課題を理解できるようにすることを目的として教授する。	共同

専攻科目	特論科目	森林環境保全学特論	森林の持続的な利用を可能にする保全のあり方を目指して、総合的な研究能力を養うことを教育目標とする。その中で森林環境保全学特論では、組成と構造による植生型を成立要因と対応させながら理解し、さらに攪乱など、植生が崩壊したあとの動態について遷移、物質生産、多様性の変化などについて理解を深める。野生動物の生息環境としての森林の役割を学ぶと共に、野生動物の管理の現状と課題についても議論を深める。また、森林の成立に重要な土壌環境について特に菌根菌との共生について理解を深める。さらに応用分野では緑化による生態系の回復のための技術やモニタリング手法を学び、理解を深めることを目的とする。	共同
		森林資源生産学特論	林の育成から伐採搬出までの総合的な研究能力を養うことを目的に、森林を育成する手法（天然更新および人工更新）における樹木生理、森林生態、森林立地、また生物多様性の重要性を理解し、さらに、森林の伐採、搬出に必要な基盤である林道・作業道や林業機械について学修する。現在における日本の森林・林業の課題やその解決法の考察、諸外国の森林・林業との比較等も行い、資料には英文誌も利用し、あわせて森林専門分野における専門性を高めることも目標とする。	共同
		森林資源利用学特論	資源は、持続的な利用が可能であり、利用に伴う環境への負荷が小さくなくてはならない。森林資源である木材や特用林産物はそのような性質をもともと備えているが、21世紀の科学進歩に即した技術を駆使した活用法においても環境負荷への限りない軽減が図られなくてはならない。その目標を達成するための学理と先端を学び、実用化による産業振興を図るとともに世界のグローバルスタンダード製品としての評価を得るための技術力を探求する発想力を養うこととする。特に化学的手法と物理学的手法との評価・検討が可能となるように教育することを目的とする。あわせて林産学分野における専門性を高めることを目標とする。	共同
		森林文化情報学特論	森林文化情報学は、森林計画学や森林経営学あるいは林業経済学や林政学を基礎に、森林の利用・林業・山村・林産業などに関する多様な情報を分析し、現代社会から未来社会を見据えた森林の文化的・社会的・経済的な利用法やそのための森林計画のあり方、地域政策のあり方、あるいは森林教育や森林レクリエーション利用などのための森林計画と森林・林業教育や地域づくりのあり方について文献購読や現地調査分析によって論究することを目的とする。	共同

研究 科 目	<p>林学特別演習 I</p>	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立つ研究・教育を行なう。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別演習を行う。演習は実験室、奥多摩演習林などを利用し、課題に適した材料を選択させ、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別演習 I～IVは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分けるものである。林学特別演習 Iは、1年次前期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマを決定し、研究計画書を作成することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橘 隆一 (指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------------	-----------------	---	--

研究 科 目	林学特別演習Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立つ研究・教育を行なうことが基盤であり、林学特別演習Ⅰの成果をもとに、さらなる上級の教育目標の達成のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別演習を行う。演習は、実験室、奥多摩演習林などを利用し、課題に適した材料を選択させ、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分けるものである。林学特別演習Ⅱは、1年次後期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマで決定した研究計画書をもとに具体的な研究の実行を特別演習として指導するものである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橋 隆一 (指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------------	---------	--	--

研究 科 目	林学特別演習Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を行なうことが基盤であり、林学特別演習Ⅱまでの成果をもとに、さらなる高度な教育目標の達成のために指導するものである。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別演習を行う。演習は、実験室、奥多摩演習林などを利用し、課題に適した材料を選択させ、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別演習Ⅲは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分けた最終段階に発展させるための応用とそれまでの検証を実施するものである。林学特別演習Ⅲは、2年次前期に履修させる。すなわち、到達目標は、指導課題に沿ったテーマの取りまとめのための考察や統計的な検証とその問題点を多面的に議論して、修士論文や学術投稿論文を作成する指導となる。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育のをはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橘 隆一 (指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したりリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>
--------------	---------	--

研究 科 目	林学特別演習Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立つ研究・教育を行なうことが基盤であり、林学特別演習Ⅲまでの成果をもとに、修士としての最終的な学理と技術をまとめるとともに高度な知識を習得させることを教育目標として指導するものである。特に、森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野における先端情報を解釈可能な状況とすべく院生の研究課題に応じた特別演習を行う。演習は、個人の達成度に応じて学内外の研究施設などを利用し、課題に対応して成果を得るように指導する。</p> <p>なお、林学特別演習Ⅳは、修士論文を最終的に完成するプロセスである4段階に分けた最終のものである。林学特別演習Ⅳは、2年次後期に履修させる。到達目標は、独自の視点を持って科学的に考察し他の研究者と有益なディスカッションを実施する能力とともに学術論文の取りまとめが可能となるように指導する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員)) (林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員)) (木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員)) (森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員)) (林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橋 隆一 (指導教員)) (治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したりリモートセンシングやGPSを利用して森林管理技術について指導を補助する。</p>
--------------	---------	---



研究 科 目	林学特別実験 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を行なう。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別実験を行う。実験は実験室、奥多摩演習林などを利用し、課題に適した材料を選択させ、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別実験 I～IVは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分けるものである。林学特別実験 Iは、1年次前期に履修させる。到達目標は、林学特別演習 I で組み立てた研究テーマを推進していくための実験方法を習得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橋 隆一 (指導教員))(治山緑化工学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------------	----------	--	--

研究科目	<p>林学特別実験Ⅱ</p>	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立つ研究・教育を行なう。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別実験を行う。実験は、進展度合いに応じて学内外の連携施設やフィールドを駆使して、課題に適した、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を実験科学的に習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別実験Ⅱは、林学特別実験Ⅰをさらに発展させたものであり、1年次後期に履修させる。到達目標は、林学特別演習Ⅱで組み立てた研究テーマを推進していくための実験方法が適切かをいくつかの側面から検証する能力を習得することを目的として指導する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橘 隆一 (指導教員))(治山緑化工学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理技術を行うについて指導を補助する。</p>	
------	----------------	--	--

研究 科 目	<p>林学特別実験Ⅲ</p>	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を行なう。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別実験を行う。林学特別実験Ⅱの履修までに修得した実験技術と学理を細かく検証し、修士としての学位論文課題に適した実験内容であるかを精査し、その科学的根拠を検証する知識と解釈の方法を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別実験Ⅲは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分けるものである。林学特別実験Ⅲは、2年次前期に履修させる。到達目標は、特別実験で組み立てた研究テーマを取りまとめるための手法を習得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2 上原 巖(指導教員)) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4 大林 宏也 (指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5 佐藤 孝吉 (指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6 関岡 東生 (指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7 橘 隆一 (指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8 矢部 和弘 (指導補助教員)) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9 山崎 晃司 (指導教員)) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10 今井 伸夫 (指導補助教員)) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12 田中 恵 (指導補助教員)) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13 桃井 尊央 (指導補助教員)) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14 山下 詠子 (指導補助教員)) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15 吉野 聡 (指導補助教員)) (森林経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------------	----------------	--	--

研究 科 目	林学特別実験Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を行なう。その教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別実験を行う。実験は、実験室、奥多摩演習林などを利用し、課題に適した取りまとめとして最適であるかを、専攻の指導教員が相互に指導組織を構築し調査、実験、データの解析について総合的に議論し、その検証結果を理解させることを目的として指導する。</p> <p>なお、林学特別実験Ⅳは、修士論文を最終的に完成させることを強く意識し2年次後期に履修させる。到達目標は、広く研究の専門分野から認められる論文としての価値を得るために基礎から応用までを総合的に習得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(2) 上原 巖(指導教員) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(3) 江口 文陽(指導教員)(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(4) 大林 宏也 (指導教員)(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(5) 佐藤 孝吉 (指導教員)(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(6) 関岡 東生 (指導教員)(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(7) 橘 隆一 (指導教員)(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(8) 矢部 和弘 (指導補助教員) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(9) 山崎 晃司 (指導教員) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(10) 今井 伸夫 (指導補助教員) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(12) 田中 恵 (指導補助教員) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(13) 桃井 尊央 (指導補助教員) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(14) 山下 詠子 (指導補助教員) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(15) 吉野 聡 (指導補助教員) (信連経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理技術について指導を補助する。</p>	
--------------	---------	--	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要				
（地域環境科学研究科 農業工学専攻 博士前期課程）				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
地域環境科学研究科共通科目	知的財産管理法	近年、農業分野および地域環境科学分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい価値を創造していこうとする機運が高まっている。しかしながら、知的財産に関する法律は複雑で敷居が高く、独学での習得は困難である。そこで、日頃から農業系知財を専門としている現役弁理士が、事例を多く交えながらわかりやすく知的財産を解説する。 知的財産制度の概要を知ること、知的財産の可能性を理解する。		
	インターンシップ	インターンシップとは、将来のキャリアに関連した地域環境科学に関わる職の経験を積むために、省庁、地方公共団体、企業や団体組織において、労働に従事することを指す。このインターンシップによって実社会での職業訓練を経験し、コミュニケーションや実務処理に係る能力とともに社会人としての資質の向上を獲得すること、併せて各々のキャリア設計を行い就職活動に役立てることを目標とする。		
専攻科目	基礎科目	研究倫理特講	（概要） 研究を実施し、その成果を学会で発表したり、学術雑誌に投稿する上で研究倫理を理解することは極めて重要である。本科目は、研究倫理についてコンプライアンス（法令遵守）、技術者倫理を含めて、様々な視点から理解できる研究者としての倫理観を涵養することを目的とする。さらに将来、外部の研究申請業務やプロジェクト研究に携わった場合の研究倫理管理についても解説する。  （オムニバス方式／全8回：単位認定者 8 田島 淳） （2 岡澤 宏、3 川名 太／2回）（共同） 施設工学におけるフィールド調査のサンプルやアンケート結果、実験データ等の取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  （6 島田 沢彦、7 鈴木 伸治、11 渡邊 文雄／2回）（共同） 生産環境情報・計画学におけるフィールド調査のサンプルやアンケート結果、実験データ等の取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  （8 田島 淳、10 村松 良樹／2回）（共同） 農業生産システム工学におけるフィールド調査のサンプルやアンケート結果、実験データ等の取り扱いについて具体的な注意点を教授する。  （9 三原 真智人、14 中島 亨、15 中村 貴彦／2回）（共同） 地域資源利用学におけるフィールド調査のサンプルやアンケート結果、実験データ等の取り扱いについて具体的な注意点を教授する。	オムニバス方式・共同
		プレゼンテーション法	各専門分野に関連した学協会等での口頭発表における準備から質疑対応までの一連のプロセスを通じ、発表時に必要なプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などの修得すべき能力の涵養を到達目標とする。必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。	
		フィールド調査	農業工学分野では、フィールドで調査を実施し、要求される精度のデータを取得し、適切に処理する必要がある。本講義ではこのフィールド調査法について取り扱う。専門分野毎のフィールド調査の計画、実施、データ取得、統計解析等を通して論理的思考能力、共同作業能力を修得することを到達目標とする。必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。	
		論文作成法	学協会誌等への論文投稿の準備から完成までの論文作成に必要な知識を教授する。 各専門分野に関連した学協会誌等への論文投稿の準備から完成までのプロセスを体験させることにより、論文作成の基本的能力の修得を到達目標とする。必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。	

専攻科目 基礎科目	水利施設工学特講	<p>(概要) 農業基盤施設の中でも水利利用に係るダム、取水口、水路を中心に、設計法や環境配慮型施工について講義をする。また、農業における水利利用が農村地域や国土・環境保全に果たす機能、水利施設の管理組織である土地改良区の今日的役割、地域の水環境や生態環境保全に果たす役割について分担して講義を行い、環境に配慮した水利施設管理の在り方を理解することを学修・教育の到達目標とする。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 2 岡澤 宏) (2 岡澤 宏／5回) 水理学を用いて、水利施設の設計に必要な開水路における水の流れの基礎知識を習得する。また、流域における水の動態を解析する水文モデルについても、水理学、水文学から学修する。</p> <p>(15 中村 貴彦／5回) 農業農村整備事業による水利施設の設置と土地改良区による灌漑用水管理システムについて学修する。また、水処理施設における物理処理や生物処理に関して物理化学の視点から学修する。</p> <p>(16 山崎 由理／5回) 農業地域における水質を中心とした環境問題について、地域の現状と課題や対策方法を学修する。また、環境および生態系に配慮した水利施設設計および管理について、実際の事例をふまえて学修する。</p>	オムニバス方式
	海外農業開発学特講	<p>(概要) 開発途上国を対象とした海外農業・農村開発に関する工学的手法による試験・研究や技術開発協力のあり方について、各種事例を交えながらさまざまな知見から解説を加えていく。特に、アフリカ、アジア、南米諸国での事例を紹介しながら、開発途上国の環境条件や文化について理解を深め、持続可能な農業・農村開発や技術協力の計画立案のための技術手法を修得することを到達目標とする。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 11 渡邊 文雄) (6 島田 沢彦／3回) 世界における国際農業開発の問題点にフォーカスし、事例を書籍や報告書から紹介し、これら開発ケースの背景・技術・問題点について事例ごとに詳細を解説し理解を深める。</p> <p>(7 鈴木 伸治／4回) 東アフリカでの沙漠化防止研究や東南アジアでの荒廃土壌の修復研究および国際農業研究協議グループ傘下の15の研究機関が展開する国際農業研究の概要について教授する。</p> <p>(11 渡邊 文雄／4回) 水資源の有効利用と灌漑計画の策定、さらにアジアやアフリカの途上国における農業研究協力の事例について教授する。</p> <p>(18 松原 英治／4回) 農業分野の気候変動対応、農業・農村工学分野の気候変動一般研究動向、温室効果ガス排出削減事例、さらに土壌保全と植林による温室効果ガス吸収増加事例について教授する。</p>	オムニバス方式
	土壌物理学特講	<p>(概要) 土壌物理学とは、作物栽培の基盤となる土壌における様々な物理現象を取り扱う土壌科学の一分野である。土壌物理学のなかでも、農業工学の多くの分野で広く適用できる内容を授業で扱っていく。本特講では土壌水のポテンシャル、浸潤現象、土壌レオロジーに関する高度な専門知識を修得することを目指すとともに、土壌物理学と環境問題との関連について理解を深め、灌漑排水や土壌保全への応用技術について修得することを到達目標とする。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 9 三原 真智人) (7 鈴木 伸治／5回) 土壌水のポテンシャルに関する熱力学的考察をテーマに、ポテンシャルの種類と定義、相平衡と状態変化、全ポテンシャルの平衡と水移動、界面化学について教授する。</p> <p>(9 三原 真智人／5回) 土壌侵食のメカニズムと土壌保全への応用をテーマとし、液性限界と塑性限界、ニュートン流動とビンガム流動、レオロジー特性と土壌侵食、土壌侵食防止対策への応用について教授する。</p> <p>(15 渡邊 文雄／5回) 土壌における浸潤現象のメカニズムと灌漑排水への応用をテーマとし、不飽和土中の水移動、浸潤モデル、浸潤特性とサージ灌漑、土中の水移動モデルを用いた演習について教授する。</p>	オムニバス方式

専攻科目 基礎科目	農村計画学特講	日本の農村の形成から現代までを振り返り国土開発の歴史や農村・農政の展開について講義する。後半では、過疎化、高齢化、後継者不足という問題と農村のもつ多面的機能というキーワードをもとに、日本の土地利用計画や水利計画、公共事業としての農業農村整備事業、自律的な農村集落形成、撤退の農村計画論など、生き残りをかけた新しい時代の農村の活性化策などに焦点を当て、今後の日本の農村振興について受講者との議論を交えながら講義を進める。	
	農地環境学特講	(概要) 農地環境に関わる農地造成・管理、農地保全のみならず、流域における農地の環境評価を含めて授業で取り扱う。農地保全、農地管理等に関して、農地における水、土壌、空気、肥料成分、微生物等の物質移動の実態を理解し、持続可能な作物生産のための生産環境づくりについて修得することを到達目標とする。併せて、国内のみならず海外の農地環境についても学修していく。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。  (オムニバス方式／全15回：単位認定者 9 三原 真智人) (9 三原 真智人／8回) 有機農法の適用による農地での水、土壌、空気、肥料成分、微生物等の物質移動を理解し、持続可能な作物生産のための生産環境づくりについて修得する。国内のみならず海外の農地環境についても学修していく。  (14 中島 亨／7回) 農地環境に関わる農地造成・管理、農地保全のみならず、農地における炭素循環に基づいた評価手法を含めて授業で取り扱う。国内のみならず海外の農地環境についても学修していく。	オムニバス方式
	土木材料学特講	(概要) 環境に配慮した構造物設計を行う場合、使用する土木材料にも十分な環境配慮が必要である。特にコンクリートは、農業土木、土木の基本的な材料であり、周辺環境に対しても大きな影響を持っている。ここでは力学的な側面として疲労を取り上げ、その特性や設計への応用を学ぶ。またコンクリート材料の再利用、循環利用に関する最近の知識を修得し、循環型社会構築のためにコンクリートが果たすべき役割を学ぶ。  (オムニバス方式／全15回：単位認定者 4 小梁川 雅) (3 川名 太／5回) コンクリート構造物の構造解析において必要となるコンクリートの材料特性およびその力学モデルについて学修する。また、コンクリート構造物の損傷の評価法に関する知識を修得する。  (4 小梁川 雅／10回) 材料の疲労現象は全ての構造物の設計、維持管理に必要な特性であり、その設計での考え方、コンクリートが持つ様々な疲労特性について知識を修得する。	オムニバス方式
	バイオロボティクス特講	(概要) 農業機械における典型的な構造、要素技術について理解を深めた上で、農業ロボットやバイオロボティクスに関連するアイデア創出、プログラミング、プレゼンテーション、理論的な思考の修得を目指す。  (オムニバス方式／全15回：単位認定者：8 田島 淳) (1 江上 親宏／5回) バネ-質点-ダンパー系を中心に自由振動、強制振動の問題を取り扱い、振動系の数理解法と制御について学修する。具体的には、2階線形微分方程式の解法、調和振動、減衰振動、周波数応答に関する基礎知識を修得し、様々な振動系のモデリングについて学修する。  (5 佐々木 豊／5回) 生命・生物を対象としたロボティクスについて、センシング・意思決定・制御を中心としたプログラミング技術をビジュアル型言語で学修する。  (8 田島 淳／5回) 農業機械の発達史、耕うん方法の変遷、自動制御の現状について教授し、コンピュータによるシミュレーション等を交えて修得する。	オムニバス方式

専攻科目 基礎科目	農産加工流通工学特講	<p>(概要) 農産物や畜産物、花き、加工食品の加工流通プロセスにおける各種の技術や物性計測法および品質評価技術の現状と課題について学修し、これらを理解することを到達目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 10 村松 良樹) (10 村松 良樹／8回) 農産物や食品の乾燥技術ならびにそれを取り巻く技術（前処理や濃縮など）、物性の計測方法と評価方法、応用法について教授する。</p> <p>(12 川上 昭太郎／7回) 鮮度・品質保持流通システムの現状と課題、青果物および花き(切り花)の鮮度と品質、非破壊鮮度・品質評価法 について教授する。</p>	オムニバス方式
	広域環境情報学特講	<p>(概要) 地域の水・土・植物生態情報など多岐にわたる環境情報を広域の視点でとらえて収集し、現地での各種条件をふまえて分析・評価する技術について教授する。地理情報システムの活用を前提として、その利用にあたって欠かせないGPS による位置の特定、リモートセンシングによる画像解析に関する技術手法を学び、さらには、気象、測量学の知識を加えてGIS を用いた地理空間の表現法、問題の分析・解決の手法を修得する。これらを通じて、広域環境情報の分析・評価技術を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 6 島田 沢彦) (6 島田 沢彦／8回) 地理情報システム (GIS) の基礎、衛星測位システム (GNSS) とリモートセンシング (RS) を用いた空間解析について教授するとともに、ArcGISを用いた具体的解析をPC演習で行うことにより解析技術習得を目指す。</p> <p>(7 鈴木 伸治／2回) 気候変動が広域におよぼす影響についての研究事例および空間変動特性の概要とその解析手法について教授する。</p> <p>(11 渡邊 文雄／1回) 広域土壌情報の解析手法としてのPedo-transfer関数について教授し、さらに土壌の基本的な物理指標から土壌の水理特性などを推定するソフトウェアを活用した事例を紹介する。</p> <p>(13 関山 絢子／4回) RSおよびGISについての原理および現状の技術について教授する。特に、DEM (デジタル標高モデル) および土地利用・土地被覆図のデータベースや作成方法の最新情報について理解を深める。</p>	オムニバス方式



専攻科目 特論科目	地域資源利用学特論 I	<p>(概要) 土地資源、水資源、生物資源を中心として、地域資源の有効利用と保全対策について修得する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。農業生産域を中心に土地資源、水資源、生物資源等の地域資源の有効利用のあり方と、土壤保全対策と水環境保全対策を修得することを到達目標とする。できる限り、具体的事例を取り上げて検討していく。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 9 三原 真智人) (9 三原 真智人／8回) 土地資源、水資源、生物資源を中心として、地域資源の有効利用と保全対策について修得を目指しており、農業生産域における土壤保全対策と水環境保全対策を学修する。</p> <p>(15 中村 貴彦／7回) 土地資源、水資源、生物資源を中心として、地域資源の有効利用と保全対策について修得を目指しており、農業生産域を中心に土地資源、水資源、生物資源等の地域資源の有効利用のあり方について学修する。</p>	オムニバス方式
	地域資源利用学特論 II	<p>(概要) 水資源や土地資源のみならず生物資源も含めて地域資源と捉え、それらの持続的な利用を工学的に考える特論である。まず農業用水利用と排水処理の問題を、理論的および実際的な面から講義する。また土地利用に当たり重要となる土壌の評価法について近年の新しい技術に言及しながら、農業生産に関わる生物資源として微生物に着目しその利用と、富栄養化した水源からの水利用において問題となっている微生物の問題などを講義する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 15 中村 貴彦) (9 三原 真智人／7回) 水資源や土地資源のみならず生物資源も含めて地域資源と捉え、それらの持続的な利用を工学的に考えていく。これらの地域資源の持続可能な利用を進める上で必要となる地域資源の管理・利用方法や生物多様性の評価等について学修する。</p> <p>(15 中村 貴彦／8回) 水資源や土地資源のみならず生物資源も含めて地域資源と捉え、それらの持続的な利用を工学的に考えていく。農業用水利用と排水処理の問題、土壌の評価法、農業生産に関わる生物資源としての微生物の利用等について学修する。</p>	オムニバス方式
	生産環境情報・計画学特論 I	<p>生物生産に関わる広域の環境情報、植物生体情報などの成り立ちを理解し、関係するデータの収集・分析・評価方法を修得するとともに、教員と学生および学生相互の論議を通じて、問題の分析能力を醸成することを目指す。リモートセンシングやGIS を利用した植生、水資源、土地資源などの評価法の基礎を理解し、広域の視点からの環境情報についてのアプローチに関する手法を修得することを目標とする。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。文献検索・サーベイについてはWeb of Scienceを用い、Evernote を用いて関連文献整理・レビューワークを行う。</p>	
	生産環境情報・計画学特論 II	<p>(概要) 生物生産に関わる局地の気象・水文情報のデータの収集・分析・評価方法を教授する。特に、野外での水・熱収支のモニタリングに関する原理や方法を解説するとともに、雨水の有効利用のための流出評価手法を解説する。また気候変動の評価手法についても触れる。これらの手法を用いて、生物生産環境の保全と改善のための計画と技術の修得する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 11 渡邊 文雄) (7 鈴木 伸治／7回) 熱移動、水移動に関する局地環境情報の収集・評価の手法を解説するとともに、観測機器の原理と操作方法について教授する。</p> <p>(11 渡邊 文雄／8回) 生産環境の改善と水資源の有効利用、乾燥地での雨水集水技術を解説し、さらにその降雨による地表面流出量の評価手法の一つであるCN法についても教授する。</p>	オムニバス方式

専攻科目	特論科目	<p>施設工学特論Ⅰ</p> <p>(概要)          農業土木施設の果たす役割と意義、社会に対する影響を理解する。特に道路構造物や舗装構造の意義と果たすべき役割、またこれを実現するために必要な技術的知識を修得する。これらを通して農業土木施設および施設の建設と環境の関わりについての知識を修得し、土木施設の社会的意義と問題点について考究できる広い視野を持った専門技術者を育成することを目的としている。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 4 小梁川 雅)          (3 川名 太／5回)          農業土木施設の構造的な安全性の照査法について学修する。また、舗装設計の実例について解説し、信頼性設計法の概念およびその手法に関する知識を習得する。</p> <p>(4 小梁川 雅／10回)          農業土木施設には様々なものがあるが、この授業では基幹的な施設である農道を取り上げ、特に舗装構造とその問題点、使用される舗装材料の特性について知識を修得する。</p>	オムニバス方式
		<p>施設工学特論Ⅱ</p> <p>(概要)          河川や水路を中心に、農業土木施設の果たす役割と意義を理解し、社会に対する影響を理解できる広い視野を持った専門技術者を育成することを目的としている。なかでも、農業的水利用について水文学をベースに知識の修得を目指すこととする。そして、農業土木施設及び施設の建設と環境の関わりについての知識および、土木施設の社会的意義と問題点について理解することを到達目標とする。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 2 岡澤 宏)          (2 岡澤 宏／10回)          開水路を主とした農業水利施設の設計に必要な水理学、水文学の解析手法を学ぶとともに、生態系に配慮したこれら施設の設計方法に関する知識を修得する。</p> <p>(3 川名 太／5回)          農業水利施設の構造特性と問題点、また、使用される材料の特性について学修する。また、施設の機能評価の方法を学ぶとともに、維持管理の考え方について理解を深める。</p>	オムニバス方式
		<p>農業生産システム工学特論Ⅰ</p> <p>(概要)          農業生産システムを構成する設計手法、シミュレーション手法、プログラミング手法などの具体的なサブシステムを学修し、それらに必要な基本的な知識と技術を修得させる。必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 6 田島 淳)          (5 佐々木 豊／5回)          食・環境・農業を対象とした農業生産システムに活用できるプログラミング技術について学修する。使用言語はビジュアル型言語とする。</p> <p>(6 田島 淳／5回)          農業機械に関する題材を取り上げ、機械設計法を2D・3DCADを用いて教授し、さらに機械システムの設計において微分方程式とグラフィックを用いたシミュレーション手法について学修する。</p> <p>(10 村松 良樹／5回)          熱伝導、熱伝達、熱放射といった伝熱の基礎事項を教授する。熱伝導に関しては非定常熱伝導も取り扱い、解析解の導出法を学ぶ。</p>	オムニバス方式
		<p>農業生産システム工学特論Ⅱ</p> <p>(概要)          農業生産システム工学特論Ⅰに続いて、具体的な同じサブシステムをさらに深く学修し、それらに必要な基本的知識と技術を修得させる。なお、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。          対象としたサブシステムの内容をさらに深く理解し、問題点の解決法を提案する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 8 田島 淳)          (5 佐々木 豊／5回)          食・環境・農業を対象とした農業生産システムに活用できるプログラミング技術について、農業生産システム工学特論Ⅰの内容を更に深く学修する。</p> <p>(8 田島 淳／5回)          農業機械に関わる機械設計・工作、電子回路設計・工作、3Dプリンタによる部品製作、システムの制御プログラム等について教授する。</p> <p>(10 村松 良樹／5回)          農産加工流通工学分野の研究・解析を行うために必要となる数値計算法（最小二乗法、非線形最小二乗法、微分方程式の数値解法など）をプログラミングも含めて教授する。</p>	オムニバス方式

研究 科 目	農業工学特別演習 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特別演習 I～IVは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別演習 Iは、1年次前期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って研究を推進してゆくための研究の計画および実施方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 地球上における水資源開発の知識を用いて、水資源の管理手法を学ぶとともに、農業に関係する水資源問題の解決に関する水文学的な解析手法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学、鉄筋コンクリート工学、社会基盤工学の知識を基に、材料特性に関する実験手法、材料特性の設計に対する影響解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を修得する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 本来、植物や動物といった農業生産の対象である作物は自らエネルギーを得て勝手に育つものである。農作業は主にその生育環境をコントロールして生産速度や生産量を高めるためのものである。その補助を行うのが農業機械である。その歴史と将来についてあるべき姿を議論する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p>
--------------	------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p> <p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
--	--	---	--

研究 科 目	農業工学特別演習Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別演習Ⅱは、1年次後期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って研究を実施して得られた結果を評価する方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 農業水文学の知識を用いて、灌漑排水計画の立案手法を学ぶとともに、農業に関する水資源問題の解決に関する水文学的な解析手法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学、鉄筋コンクリート工学、社会基盤工学の知識を基に、材料特性に関する実験手法、材料特性の設計に対する影響解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を修得する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 本来、植物や動物といった農業生産の対象である作物は自らエネルギーを得て勝手に育つものである。農作業は主にその生育環境をコントロールして生産速度や生産量を高めるためのものである。その補助を行うのが農業機械である。その歴史と将来についてあるべき姿を議論する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p>	
--------------	-----------	--	--

<p>研究 科 目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
-----------------------	--	--	--

研究 科 目	農業工学特別演習Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別演習Ⅲは、2年次前期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って研究を実施して得られた結果を考察し結論を導出する方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 窒素・リンを主とする水質環境学の知識を用いて、河川、湖沼、海洋における農業由来の汚濁減少を学ぶとともに、水環境問題の解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学、鉄筋コンクリート工学、社会基盤工学の知識を基に、材料特性に関する実験手法、材料特性の設計に対する影響解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術の中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を修得する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 本来、植物や動物といった農業生産の対象である作物は自らエネルギーを得て勝手に育つものである。農作業は主にその生育環境をコントロールして生産速度や生産量を高めるためのものである。その補助を行うのが農業機械である。その歴史と将来についてあるべき姿を議論する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p>
--------------	-----------	--

<p>研 究 科 目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
----------------------------	--	--	--



研究 科 目	農業工学特別演習Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別演習Ⅳは、2年次後期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って研究を実施して得られた結論・成果を発表し論文としてまとめる方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 水利施設工学の知識を用いて、農業水利分野における構造物の設計・計画・維持管理について学ぶとともに、施設の管理に関する問題の解析手法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学、鉄筋コンクリート工学、社会基盤工学の知識を基に、材料特性に関する実験手法、材料特性の設計に対する影響解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術の中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を修得する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 本来、植物や動物といった農業生産の対象である作物は自らエネルギーを得て勝手に育つものである。農作業は主にその生育環境をコントロールして生産速度や生産量を高めるためのものである。その補助を行うのが農業機械である。その歴史と将来についてあるべき姿を議論する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p>	
--------------	-----------	---	--

<p>研究 科目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
------------------	--	--	--

研究 科 目	農業工学特別実験 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特論実験 I～IVは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別実験 Iは、1年次前期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って研究を推進してゆくための研究の計画および実施方法に基づいて実験を実施することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 水文学における水文統計、降雨流出モデル、DAD解析手法を用いて、農地や森林を含む流域レベルでの水資源量の推定方法に関する知識を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学および統計学の知識を基に材料特性、特にコンクリート材料に関する実験立案から実験手法、実験結果の解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法について実験・実習を実施する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究について実験・実習を実施する。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 農作業の合理化は農業工学分野の重要な課題の一つであるが、その評価基準は時代と共に変化する。現在は作業者の労働負荷や作業安全に加えて、環境負荷や食品の安全性、フェアトレード問題と大きな課題は山積している。その課題解決の一つの方法である環境と融合するロボットの開発について実験・実習を実施する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術に関する実験手法を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について実験・実習を実施する。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する実験・実習を行う。</p>	
--------------	------------	---	--

<p>研究 科 目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用に資する実験を扱う。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について実験方法を修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について実習を通して評価手法等を修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて実習を実施する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について実験を行う。</p>	
-----------------------	--	--	--

研究 科 目	農業工学特別実験Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特論実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別実験Ⅱは、1年次後期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って実験を実施して得られた結果を評価する方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 窒素・リンを主体とする水質実験を通じて、河川や湖沼における農業由来とする水質汚濁の評価手法を学ぶとともに、その改善策に関する知識を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学および統計学の知識を基に材料特性特にコンクリート材料に関する実験の計画立案から実験手法、実験結果の解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法について実験・実習を実施する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究について実験・実習を実施する。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 農作業の合理化は農業工学分野の重要な課題の一つであるが、その評価基準は時代と共に変化する。現在は作業者の労働負荷や作業安全に加えて、環境負荷や食品の安全性、フェアトレード問題と大きな課題は山積している。その課題解決の一つの方法である環境と融合するロボットの開発について実験・実習を実施する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術に関する実験手法を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について実験・実習を実施する。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する実験・実習を行う。</p>	
--------------	-----------	---	--

<p>研究 科 目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用に資する実験を扱う。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について実験方法を修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について実習を通して評価手法等を修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて実習を実施する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について実験を行う。</p>	
-----------------------	--	--	--

研究 科 目	農業工学特別実験Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特論実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別実験Ⅲは、2年次前期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って実験を実施して得られた結果を考察し結論を導出する方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 河川や水路を対象として、水理学の基礎知識を通じて水路における水の動きを物理学的に捉えたり、水資源を把握するための解析方法に関する技術を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学および統計学の知識を基に材料特性、特にコンクリート材料に関する実験計画立案から実験手法、実験結果の解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法について実験・実習を実施する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究について実験・実習を実施する。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 農作業の合理化は農業工学分野の重要な課題の一つであるが、その評価基準は時代と共に変化する。現在は作業者の労働負荷や作業安全に加えて、環境負荷や食品の安全性、フェアトレード問題と大きな課題は山積している。その課題解決の一つの方法である環境と融合するロボットの開発について実験・実習を実施する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術に関する実験手法を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について実験・実習を実施する。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する実験・実習を行う。</p>
--------------	-----------	---

<p>研究 科目</p>		<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用に資する実験を扱う。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について実験方法を修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について実習を通して評価手法等を修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて実習を実施する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について実験を行う。</p>	
------------------	--	--	--



研究 科 目	農業工学特別実験Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、環境に配慮した生物生産に関わる課題について、物理学や力学を基礎として問題解決手法を開発する「農業工学的アプローチ」を手法として考究する。そのため、地域資源利用学、生産環境情報・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、考察、結論の導出、そして研究成果の発表、論文作成などの各段階において必要な技術を教授する。農業工学特論実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文を完成させるまでのプロセスを4段階に分け、指導を行うものである。農業工学特別実験Ⅳは、2年次後期に開講する。到達目標は、研究テーマに添って実験を実施して得られた結論・成果を発表し論文としてまとめる方法を修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 農業流域を対象とした水文モデルに注目し、降雨流出過程における農業流域からの水の流出現象を知るための水文流出モデルに関する知識を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 小梁川 雅(指導教員))(社会基盤工学) 土木材料学および統計学の知識を基に材料特性、特にコンクリート材料に関する実験立案から実験手法、実験結果の解析手法を修得する。</p> <p>(5 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) 情報工学技術を中核にコンピューティング/データサイエンス/認識工学/機械学修/AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発・解析などを行い、農業生産システム工学における調査や実験で問題解決能力が向上するよう教授する。</p> <p>(6 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法について実験・実習を実施する。</p> <p>(7 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究について実験・実習を実施する。</p> <p>(8 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 農作業の合理化は農業工学分野の重要な課題の一つであるが、その評価基準は時代と共に変化する。現在は作業者の労働負荷や作業安全に加えて、環境負荷や食品の安全性、フェアトレード問題と大きな課題は山積している。その課題解決の一つの方法である環境と融合するロボットの開発について実験・実習を実施する。</p> <p>(9 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、農村開発や地域環境の修復保全技術に関する実験手法を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について実験・実習を実施する。</p> <p>(10 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性(構造、硬さなど)、化学的特性(成分組成、状態など)が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(11 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水資源の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での降雨の集水技術や節水灌漑技術などに関する実験・実習を行う。</p>	
--------------	-----------	--	--

研究 科 目	<p>(13 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(14 中島 亨(指導補助教員))(地域資源利用工学) 土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の活用を通して土地資源や水資源の持続的利用に資する実験を扱う。尚、本教員は上記研究課題に係る実験指導を補助する。</p> <p>(15 中村 貴彦(指導教員))(農村環境工学) 土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について実験方法を修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について実習を通して評価手法等を修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて実習を実施する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について実験を行う。</p>
--------------	---

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
（地域環境科学研究科 造園学専攻 博士前期課程）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域環境科学研究科 共通科目	知的財産管理法	近年、農業分野および地域環境科学分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい価値を創造しようとする機運が高まっている。しかしながら、知的財産に関する法律は複雑で敷居が高く、独学での習得は困難である。そこで、日頃から農業系知財を専門としている現役弁理士が、事例を多く交えながらわかりやすく知的財産を解説する。 知的財産制度の概要を知ること、知的財産の可能性を理解する。	
	インターンシップ	インターンシップとは、将来のキャリアに関連した地域環境科学に関わる職の経験を積むために、省庁、地方公共団体、企業や団体組織において、労働に従事することを指す。このインターンシップによって実社会での職業訓練を経験し、コミュニケーションや実務処理に係る能力とともに社会人としての資質の向上を獲得すること、併せて各々のキャリア設計を行い就職活動に役立てることを目標とする。	
専攻科目 基礎科目	研究倫理特講	<p>（概要） 修士論文（制作）を進める上で、その社会的責務としての研究倫理を、研究テーマの設定、データの蒐集・処理、報告・発表、活用のそれぞれの段階で修得する。また造園の職域・職能に関する技術的倫理との関係も修得する。</p> <p>（オムニバス方式／全8回：単位認定者 5 高橋 新平） （1 栗野 隆／1回） 造園施設材料学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データの活用のそれぞれの段階での研究倫理の指導を行う。</p> <p>（2 金子 忠一／1回） 造園計画学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データの活用のそれぞれの段階での研究倫理の指導を行う。</p> <p>（3 國井 洋一／1回） 造園施工学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データの活用のそれぞれの段階での研究倫理の指導を行う。</p> <p>（4 鈴木 貢次郎／1回） 造園植物学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データの活用のそれぞれの段階での研究倫理の指導を行う。</p> <p>（5 高橋 新平／2回） 造園植栽学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データ活用の展開と研究倫理に関する具体的例を教授する。</p> <p>（6 服部 勉／1回） 造園設計学に関わる研究テーマの設定、研究データの蒐集・処理、研究データの報告・発表、データの活用のそれぞれの段階での研究倫理の指導を行う。</p> <p>（7 水庭 千鶴子／1回） 都市緑化に関わる研究テーマの設定、研究データの処理方法、結果のまとめと展開、発表方法、データ活用と技術者としての倫理について教授する。</p>	オムニバス方式
	論文英語	本専攻では、造園学に必要な調査、計画、設計、植物材料、無機物材料、施工技術、管理技術に関わる幅広い知見を国際的視野で学ぶ。そのため論文英語の読解力と要約としてのまとめができるレベルの英作文能力の向上を目標とする。スキル向上によって国際的にオリジナル性の高い研究ができるようにする。	

専攻科目 基礎科目	造園調査法詳論	<p>(概要) 環境問題は、今や国境を超え、その解決には国境を越えて臨まなければならない。造園学をグローバルスタンダードで究めていくために、国内外を越えて研究を行うための調査、分析手法を修得することを目標とする。</p> <p>なお、本講義は、造園調査法詳論演習と一体的に実施し、フィールドを対象として、造園調査の一連の流れやまとめを修得する。調査計画の立案、具体的調査方法、現地調査におけるデータ収集と結果の解析や分析の具体事例をあげその一連の方法論について教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 5 高橋 新平) (1 栗野 隆、3 國井 洋一、4 鈴木 貢次郎／5回) (共同) フィールドにおいて、植物の造園的利用とその基礎的事項(分類、生理、生態)に関わる調査、解析の視点、並びに各種計測技術や施工技術、及び造園施設材料を用いた具体的な調査手法について教授する。</p> <p>(2 金子 忠一、7 水庭 千鶴子／5回) (共同) フィールドにおいて、造園計画学、及び植物の造園的利用とその基礎的事項(土壌学)に関わる調査、解析の視点を教授する。</p> <p>(5 高橋 新平、6 服部 勉／5回) (共同) フィールドにおいて、地被植物及び草本を主とした植栽、及び造園設計学に関わる調査、解析の視点を教授する。</p>	オムニバス方式・共同
	造園調査法詳論演習	<p>(概要) 環境問題は、今や国境を超え、その解決には国境を越えて臨まなければならない。造園学をグローバルスタンダードで究めていくために、国内外を越えて研究を行うための調査、分析手法を修得することを目標とする。</p> <p>なお、本演習では、造園調査法特論と一体的に実施し、フィールドを対象として、造園調査の一連の流れを体験、修得する。調査計画の立て方、調査方法の設定、現地調査によるデータ収集、調査結果の分析、調査結果の報告を演習形式で実施する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者 11 福岡 孝則) (8 阿部 伸太、10 金澤 弓子／7回) (共同) 造園植物や緑地植物及び造園設計、デザインに関わる調査、解析の視点について演習を行う。</p> <p>(9 荒井 歩、11 福岡 孝則／8回) (共同) 緑地空間における植物群の機能やそれを活かした造園設計・デザイン・景観構成に関わる調査、解析の視点について演習を行う。</p>	オムニバス方式・共同
	日本庭園詳論	日本の庭園史を中心に学び、庭園の歴史的意味や特徴について文化・社会的背景から読み解くことにより、都市空間や田園景観における展開の可能性など、現代社会における庭園の位置づけ・役割・維持管理(マネジメント)の在り方について造園計画学的側面から考察することを主眼とする。更に庭園の評価・研究上必要となる各種文献などの分析方法・研究の視点についても合わせて講義する。	
	観光計画詳論	<p>観光計画の領域は幅広いが、本講では主に観光活動の受け皿となる空間整備や観光地づくりの観点からアプローチする。21世紀成熟社会を迎え、観光活動は単なる地域ビジネスや地域活性化の手段だけでなく、フランスのとれた国土づくり、地域文化や美しい景観の形成、地域の個性や魅力づくりなどと密接に関わっている。</p> <p>本講では先ず、観光の概念、観光の今日的な意義について理解するとともに、観光計画の考え方、手順と方法を学んだ上で、様々な具体的な計画事例の紹介と分析を通して、それぞれの特性を活かした魅力ある観光地づくりの実際について学ぶ。また、具体的な地域を選んで、計画を考え、プランニング能力を養う。</p>	
	ランドスケープマネジメント詳論	ランドスケープマネジメントは、資源性、経済性、地域性等をふまえた、ランドスケープ空間の利活用、行政・市民・企業の協働、施設運営や地域づくりの評価システムの構築など、植物や施設のメンテナンスから、トータルエリアマネジメントへと展開している。造園空間や地域におけるマネジメントの実例を通しランドスケープマネジメントの実践にかかわり知識と技術について修得する。	
ランドスケープデザイン詳論	ランドスケープデザインは、庭園デザイン、公園デザイン、環境デザインと拡大し展開してきている。身の周りの空間から国土空間までの多様な空間や地域を対象として、ランドスケープデザインの思潮展開とともに、最近のランドスケープデザインを取り巻く環境や状況について、ランドスケープアーキテクトによる実務紹介を通して、ランドスケープデザインの手法や技術について修得する。		

基礎科目	樹芸詳論	樹芸は樹木を対象として観賞と利用を最大にすることを目的とする人の生活に欠くことのできない学と術である。植物学における分類、生理、形態、生態を基礎として樹木の樹形美、色彩美、季節美を發揮させるための成長、育成、植栽、剪定、保護などの施策について講義する。また造園の営みは大地で展開される土地産業としての視点がある。樹木がもっている美性を發揮させながら生産・経済事業として展開させる術とともに、樹木が地域の景観形成へ寄与するための人の生活と文化活動についても講義する。造園の営みに不可欠な樹木について応用的視点から人との関係について論述する。	
	芝生詳論	草本植物の個体レベルでの生理生態を基礎として環境修復や緑化植栽に至る技術や理論、及び植物(草本)文化を学ぶ。具体的には、草本個体の生活、植物生産と季節変化、環境要因と成長解析、成長解析と計算事例、草本個体と環境ストレス(物理的刺激と体内生理反応、浸透圧ストレスと体内反応、環境要因ストレス(光・水分・温度)と生育などについて学修する。	
	ランドスケープ空間情報詳論	測量は建設分野において基幹となる技術であるが、GIS・GNSS(GPS)・写真測量・レーザ計測といった空間情報技術を応用展開し、造園空間を構築する方法論について学ぶ。特にそれらの技術はi-Constructionの取り組みに欠かせないものであるため、実際の応用例も含めてその優位性を理解する。 さらにBIMやCIMといった実社会での3次元データの利活用についても学ぶことにより、各種空間情報に関する取得方法、技術的詳論、データの扱い方、応用例を学び、調査研究に役立てる方法について教授する。	
専攻科目	造園計画・設計学特論	(概要) 自然と人間が共生する快適な環境の実現に向けて、造園計画および造園設計の研究領域から、都市および農山村の地域環境ならびにランドスケープ空間を計画的に保全、活用、創出するための理論と手法・技術について修得する。身の周りの空間から国土空間にわたる多様な空間を対象として、都市、自然、環境、景観などの多面的な観点から、本質論、計画論、設計論、制度論、管理運営論について修得する。  (オムニバス方式/全15回:単位認定者 2 金子 忠一) (2 金子 忠一/8回) 造園計画の研究領域から、都市および農山村の地域環境ならびにランドスケープ空間を計画的に保全、活用、創出するための理論と手法・技術について教授する。  (6 服部 勉/7回) 造園設計の研究領域から、庭園や公園を始めとするランドスケープ空間の保全、活用、創出するための理論と手法・技術について教授する。	オムニバス方式
	造園植物・植栽学特論	(概要) 造園空間を構成する基礎的な素材である植物材料について学び、調査、計画、設計、施工、管理に生かす力を養う。植物材料の分類、生理、様々な環境適応、機能性や特性、植物が成す意匠の他、文化(歴史)や経済等へのはたらきを考える。都市やその周辺地域における植栽や緑化、植生の再生復元・保全・利活用、森づくり、また植栽や植生の管理・樹木医に資する基礎的知見や、手法を修得する。また関連する造園植栽・緑化の研究現状や課題についても提示し、研究手法やその方向性について修得する。  (オムニバス方式/全15回:単位認定者 5 高橋 新平) (4 鈴木 貢次郎/5回) 造園学における調査、計画、設計、施工、管理に関わる造園植物の分類、生理、生態について教授する。  (5 高橋 新平/5回) 造園植物の中で地被植物ならびに芝草類をはじめとした草本植物の分類、生理、生態に関する基礎的知識に基づき、機能、利用、管理に関する研究手法やその方向性について教授する。  (7 水庭 千鶴子/5回) 緑地植物の調査、計画、設計、施工、管理に関わる植栽基盤土壌について、教授する。	オムニバス方式
特論科目			

<p>専攻科目</p>	<p>特論科目</p>	<p>造園施設材料・施工学特論</p> <p>(概要)          構造物、工作物、地割等に関わる造園施設材料・施工について、最新技術で開発された材料や日本古来の伝統的材料を主対象に、種類、特徴、機能、用途に関する専門的知識を養う。材料の種類別各論にもとづき、造園空間における施工上の扱いを把握しつつ、工種別の施工方法・技術、道具・機械、施工管理と設計監理、維持管理に至るまでの一連の工程を体系的に理解する。さらに造園建設に関わる最新の技術開発や世界的にも注目されている文化財庭園保存技術についても理解を深め、事例研究も含めて造園建設を身近なものとして捉えられるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回：単位認定者 3 國井 洋一)          (1 栗野 隆/7回)          造園施設材料のうち、特に伝統材料の種類別の各論と道具の各論をふまえ、作庭時における材料の加工方法と施工方法について教授する。</p> <p>(3 國井 洋一/8回)          造園施設材料のうち、特に近年の技術により開発された材料を扱う際における種類別各論にもとづき、加工方法と施工方法について教授する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
-------------	-------------	---	----------------

研究科目	造園学特別演習 I	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と修士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。造園学特別演習I～IVは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。造園学特別演習Iは、1年次前期に履修する。指導課題に沿ったテーマを決定し、研究計画書を作成することを到達目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学) 古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント) 自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報) 空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS (GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探求し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学) 造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学) 造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする調査研究の検証結果(根拠)があり、これら技術と検証結果の根拠から調査研究能力を高める指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化) 日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員)) (緑化植栽) 植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>	
------	-----------	---	--

<p>研究 科目</p>		<p>(9 荒井歩 (指導補助教員) ) (景観・緑地環境マネジメント)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤弓子 (指導補助教員) ) (造園植物学)      造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景 (文化等) も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡孝則 (指導補助教員) ) (ランドスケープデザイン)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
------------------	--	--	--



研究 科 目	造園学特別演習Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と修士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。造園学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。造園学特別演習Ⅱは、1年次後期に履修する。指導課題に沿って最新の知見や技術に関する情報の収集・検討に基づく、研究のテーマと計画の最適化を到達目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学)</p> <p>古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント)</p> <p>自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報)</p> <p>空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS(GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探求し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学)</p> <p>造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学)</p> <p>造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする調査研究の検証結果(根拠)があり、これら技術と検証結果の根拠からさらに調査研究能力を高める指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化)</p> <p>日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員)) (緑化植栽)</p> <p>植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------------	----------	---

<p>研究 科 目</p>		<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学)      造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
-----------------------	--	--	--

研究 科 目	造園学特別演習Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と修士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。造園学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。造園学特別演習Ⅲは、2年次前期に履修する。指導課題に沿って決定した研究テーマで修士論文の骨子の作成を到達目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学) 古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント) 自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報) 空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS (GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探索し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学) 造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学) 造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする調査研究の検証結果(根拠)があり、これら技術と検証結果の根拠からさらに調査研究能力を高める指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化) 日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員)) (緑化植栽) 植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------------	----------	---

<p>研究 科 目</p>		<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学)      造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
-----------------------	--	--	--

研究 科 目	造園学特別演習Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と修士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。造園学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。造園学特別演習Ⅳは、2年次後期に履修する。修士論文の完成と成果の発表を到達目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員) ) (造園施設材料学)</p> <p>古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員) ) (景観・緑地環境マネジメント)</p> <p>自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員) ) (造園建設・空間情報)</p> <p>空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS(GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探索し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員) ) (造園植物学)</p> <p>造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員) ) (緑化植栽学)</p> <p>造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする調査研究の検証結果(根拠)があり、これら技術と検証結果の根拠からさらに調査研究能力を高める指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員) ) (庭園文化)</p> <p>日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員) ) (緑化植栽)</p> <p>植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------------	----------	---

研究 科 目	<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント) 自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学) 造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン) 自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>
--------------	---

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校は、収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
（地域環境科学研究科 地域創成科学専攻 修士課程）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域環境科学研究科 共通科目	知的財産管理法	近年、農業分野および地域環境科学分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい価値を創造していかうとする機運が高まっている。しかしながら、知的財産に関する法律は複雑で敷居が高く、独学での習得は困難である。そこで、日頃から農業系知財を専門としている現役弁理士が、事例を多く交えながらわかりやすく知的財産を解説する。 知的財産制度の概要を知ること、知的財産の可能性を理解する。	
	インターンシップ	インターンシップとは、将来のキャリアに関連した地域環境科学に関わる職の経験を積むために、省庁、地方公共団体、企業や団体組織において、労働に従事することを指す。このインターンシップによって実社会での職業訓練を経験し、コミュニケーションや実務処理に係る能力とともに社会人としての資質の向上を獲得すること、併せて各々のキャリア設計を行い就職活動に役立てることを目標とする。	
専攻科目 基礎科目	研究倫理特講	<p>（概要）</p> <p>研究を行い、その成果を学術論文や学会発表の形で公表する上で、研究倫理および生命倫理を理解することは非常に重要である。さらに、実社会でさまざまな組織に所属して公的な活動を行う上では、企業倫理や技術者倫理といった職業倫理への深い理解も必要となる。そこで本科目は、法と倫理についてコンプライアンスを含め様々な視点から理解し、さまざまな研究分野での注意点を例示しながら、研究者としての倫理観を涵養することを目的とする。さらに実社会での活動を見据えて、職業倫理についても解説する。</p> <p>（オムニバス方式／全8回：単位認定者 8 本田 尚正）</p> <p>（1 亀山 慶晃／1回） 生命倫理の概論について講義し、それらに対応して研究者が遵守すべきコンプライアンス上の重要事項を会得させる。また、各種データの取り扱いについて、生命倫理の観点から具体的な注意点を教授する。</p> <p>（2 鈴木 伸一／1回） 地域環境保全学研究における調査データおよび実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。</p> <p>（3 武生 雅明／1回） 保全生態学研究における調査データおよび実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。</p> <p>（5 竹内 康／1回） 地域環境工学研究における調査データおよび実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。</p> <p>（7 藤川 智紀／1回） 研究倫理の概論について講義し、研究不正（改ざん、捏造、盗用など）が起こる背景と、現行の研究内容・研究者の評価方法の在り方、実際の不正事例などについて解説する。</p> <p>（8 本田 尚正／2回） 企業倫理、技術者倫理の概論について講義し、組織における職業倫理のあり方について、実際の不正事例や、事故や不正の発生を未然に防止した好事例などを交えて解説する。また、研究倫理、生命倫理および職業倫理を学ぶにあたり、法と倫理の共通点、相違点についても解説する。</p> <p>（10 入江 彰昭／1回） 地域デザイン学研究における調査データおよび実験データの取り扱いについて具体的な注意点を教授する。</p>	オムニバス方式
		論文英語	地域創成科学（生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成）の各分野で刊行されている国際学術雑誌に掲載されている英語論文に関し、各自の研究に関連する論文の検索とレビューを通じて、正しい英文法や専門用語の理解を促し、英語論文のリーディングスキル向上を図る。同時に、各自の研究分野に関する国際的な研究成果を整理し、現在の研究動向を把握する能力を育成することを旨とした学修を行う。また、英語論文（和文論文での英文要旨を含む）の執筆を行うことで、正確な英語表現により科学論文を的確に執筆できる能力を身につける。

専攻科目	基礎科目	プレゼンテーション法	本講義では、学会発表、修士論文発表等において必要となるプレゼンテーション(口頭発表および質疑応答)の基本スキルを修得する。とくに、①発表の基本的な流れの把握、②発表の組立て、③発表スライド作成の基本、④プロジェクターを利用した発表形式、⑤質疑応答への対処方法についての基本スキルを身につける。講義では双方向型の授業展開を意識して、学生自身に発表を体験させるとともに、他の学生の発表を視聴することにより、自身への適用方法を考察できる能力を高める。	
		実験・調査計画法	地域創成科学(生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成)は自然科学と社会科学の両分野にまたがる非常に幅広い学際的研究分野である。そのため用いられる実験・調査手法、得られるデータの種類およびデータの解析手法も多岐にわたる。この科目では、各分野で行われる実験・調査手法を学ぶと共に、得られたデータのデジタル入力と管理方法、データの種類にあった適切な統計処理などの解析方法を修得する。最終的には、そうした解析方法を予め考慮した上で実験・調査計画を策定できる能力の養成を目指す。	
		地域経営政策論	本講義では、地方自治体を始めとする地域共同体による地域づくりの実例を題材として、農山村・中山間地域が抱える自然的・社会的・経済的な問題の抽出、要因分析および解決策について討論を行い、対策の策定手順と方法を学ぶ。人口減少、とくに若年層の都市流出による過疎化および高齢化の進行、農業の担い手不足による農地の荒廃化など、多くの厳しい課題に直面する条件下にあって、地域経営の観点からみた地域づくりの成功例、期待どおりには進まなかった事例をそれぞれ取り上げ、各教員の専門分野の視点から評価分析を行い、双方向型の討論を通じて理解を深める。	
		フィールド調査	地域創成科学(生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成)では、それぞれの地域が抱える課題を発見・解決するための対策を考案することが求められている。そのため対象地域では、地形・地質や気象、水、土壌、生物相などの自然環境から、歴史や風俗、人口動態、産業構造、社会資本などの社会環境まで、フィールド調査によって幅広く情報を収集することが必要とされる。この科目では、自然環境と社会環境のそれぞれについて、幅広い情報を現地での確に収集できるように、各分野がフィールド調査で実施している調査手法について具体例を提示し、教授する。	



専攻科目	基礎科目	環境教育法	<p>(概要)</p> <p>本講義は農学分野である地域創成科学（生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成）の視点から環境教育を考える内容とする。具体的には、人を取り巻く環境である山地・森林、河川、海域に生息する生物資源を題材として、それら生物多様性の理解から、食・エネルギー資源として活用する際の保全や、防災を含めた土地の利用および管理の仕方、地域計画のあり方などを学び、将来の農学分野における地域創成の担い手として活用できる総合的な環境教育の手法を修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回：単位認定者：6 武田 晃治) (3 武生 雅明／3回)</p> <p>原生的な自然と、地域の生業や生活に利用されることで維持されてきた二次的自然とは、そこに分布する生物相が異なり、生活史や環境への形態的・生理的応答の特徴は大きく異なっている。そのため、その保護・保全に必要な対策も異なっている。この講義では、自然環境の適切な保護・保全策を市民に伝えるために求められる環境教育の手法について解説する。</p> <p>(6 武田 晃治／6回)</p> <p>現代の豊かな自然環境の形成について、進化の視点から解説する。また、生物の色や形などの意味やその機能について科学的な視点から解説・考察を行う。生物ネットワークによる生物多様性の働きに着目し、物質循環を指標とした人と他生物との関わりを解説する。また、環境指標生物やそれら生息環境に存在する物質に着目した化学的実験手法についても解説する。</p> <p>人間の活動（乱獲、環境汚染、外来種の侵入など）による生態系への影響などを解説し、今後の対応策について調べ学修を取り入れ理解を深める。</p> <p>(8 本田 尚正／3回)</p> <p>持続可能な循環型社会の構築を目的として、農地・林地の活用・保全を題材とした自然環境教育、道路・水路等の社会基盤施設の保全を題材とした社会環境教育、自然環境および社会環境の知識を活用した防災教育について、それぞれの必要性和方法を具体的な事例を交えながら解説する。</p> <p>(10 入江 彰昭／3回)</p> <p>各地域の里山（森・屋敷林・川・里・農地）に学ぶ持続可能性と流域連携によるグリーンインフラによる環境教育について講義する。里山の自然と暮らし・農文化・生きる知恵と技を経験・実証的事実に基づく帰納的アプローチで科学し、自然を賢く活かす里山の自然立地的適正土地利用と持続的な里山管理を理解し、主体的・協働的・体験的に学ぶ環境教育プログラムを構想・企画する力を身につけることを到達目標とする。</p>	オムニバス方式
		保全生態学特論Ⅰ	<p>地域において生物を保全するには、対象とする生物の進化的・系統地理的な分布の背景から、生活史、環境条件に対する生理的応答、周辺に生育する他の生物種との相互作用、さらにエネルギーや物質の循環の中での位置づけや、生育立地の配列の規則性など、スケールや階層の異なるさまざまな情報の収集とその理解が必要である。そのため生態学の各研究分野の基礎理論を修得することが必須である。本特論では、個体群生態学、群集生態学、生態系生態学、景観生態学、生理生態学、進化生態学など生態学の各分野における基礎理論について講義を行い、地域の生物多様性を適切に保全・再生するために必要な基礎理論の修得を目標とする。</p>	共同
		保全生態学特論Ⅱ	<p>地域の生物多様性を適切に保全・再生するためには、保全生態学特論Ⅰで修得した生態学の基礎理論を基として、保全生態学、環境植栽学、緑化学など、自然再生のための調査・施工・管理に必要な理論と技術について学ぶことが必要である。本特論では、保全生態学、環境植栽学、緑化学などの理論について講義を行うと共に、実際に自然再生を試みているフィールドにおいて、取り組み事例の見学や、用いられている手法について実習を行うことによって、生物多様性の保全・再生に必要な技術を修得することを目標とする。</p>	共同
	特論科目	地域環境保全学特論Ⅰ	<p>本特論では、地域環境保全学における基礎的な知識・技能である、地域環境を総合的に捉える能力と、自然環境と土地利用におけるその地域の特徴や問題点について洞察する力の修得を目標としている。人間の生活空間としての地域環境は、自然環境と土地利用との複雑な相互関係により形成された自然的・社会的環境であり、地域固有の景観を構成している。地域環境の把握には、一次生産者である多様な植物・植生により顕在化されている景観を基盤として、そこに生活する動物・昆虫など生き物の種類や生態を明らかにする必要がある。講義では、植生学、景観生態学、動物学、昆虫学を中心とした生物的自然について解説する。また、それらの自然情報を地理空間情報として統合・解析を行うGISの理論や技術についても学ぶ。本特論では、基礎論として研究史や概念、用語などを中心に展開する。</p>	共同

専攻科目	特論科目	地域環境保全学特論Ⅱ	本特論では、地域環境保全学特論Ⅰの学びを基礎として、実際の地域環境の研究事例をもとに、地域環境の把握方法や環境保全への応用などについての知識を修得することを目標とする。講義では以下の内容について考察する。地域環境の構成単位である景観とその構成員である多様な植物・植生や動物・昆虫は、地域の生態系においてどのような種類がどのような生活史や生態をもっているのか。また、現在の生態系はどのような植生動態の位置にあるのか。植生の種類とそこを生息場所としている動物との相互関係の把握など。これらは自然環境特性に配慮した、無理のない土地利用を行うためには必要不可欠な知識であり研究テーマであり、緑地形成やビオトープづくりなど自然再生・復元のための植栽理念や技術、動物の生息環境管理などこれからの応用面においても重要である。	共同
		地域環境工学特論Ⅰ	本特論では、農山村・中山間地域における持続可能な循環型社会の創出と安全・安心の地域づくりをめざし、農業活動によって排出される各種環境負荷の増大化、自然災害の頻発化や大規模化、社会資本ストックの維持管理費の増大化といった、地域社会が抱える課題を解決するため、農地工学・防災科学・農業造構学などの面からより深い講義を行う。土や水の基本的性質や力学に関する知識を農地、災害現場、社会基盤施設に活用して、地域の現場で発生するさまざまな技術的課題の要因を分析し、対策を提案できる能力を身につけることを目的とする。	共同
		地域環境工学特論Ⅱ	本特論では、農山村・中山間地域における持続可能な循環型社会の創出と安全・安心の地域づくりをめざし、現代の農山村・中山間地域の社会的ニーズに即応できる調査、分析および研究能力を高めるための講義を行う。土壌物理学・河川工学・道路工学などの基礎研究の知見に加えて、実際の農業生産現場、災害現場、社会基盤施設における最新の問題点や研究成果を事例として、地域の現場で発生すると考えられるさまざまな技術的課題を予測し、それらの発生を未然に防止・抑止するための予防的な対策を考案できる能力を身につけることを目的とする。	共同
		地域デザイン学特論Ⅰ	持続可能な開発目標（SDGs）の達成をめざすグローバルな課題に向かって、流域・都市農村連携による地域づくり・社会づくり研究に取り組む。様々な図書に触れ、自然科学、社会科学、人文科学の知識の幅を広げ、地域の課題を正確に発見・認識し、その課題の解決までを扱う地域デザイン学研究手法について講義する。自然・社会・人文科学的アプローチによる地域認識と歴史認識を統合したデザイン研究思考力を身につけることを到達目標とする。	共同
		地域デザイン学特論Ⅱ	環境教育(ESD)・グリーンインフラ・観光まちづくり・環境政策・里山と暮らしの実践研究を通じて、地域を守るデザインを講義する。特定地域の現場の調査・分析し、総合化・評価する統合学としての地域デザイン学研究に自らがポジティブに取り組み、地域の課題の発見から課題の解決までの実践的デザイン研究力を身につけることを到達目標とする。	共同

研究 科 目	地域創成科学特別演習 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別演習 I～IVは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別演習 I は、1年次前期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿った研究テーマを設定し、研究計画書を作成することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員) ) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員) ) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員) ) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員) ) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらを通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員) ) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員) ) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員) ) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員) ) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	--------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立について指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集団的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法について指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法について指導を補助する。</p>	
--	--	--	--

研究 科 目	地域創成科学特別演習Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別演習Ⅱは、1年次後期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿って最新の知見や技術に関する情報を収集・検討し、それらに基づいて研究テーマならびに研究計画の最適化を図ることである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員)) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員)) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員)) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員)) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらを通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員)) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員)) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員)) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員)) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	-------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立について指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集团的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法について指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源(自然資源・文化資源)の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法について指導を補助する。</p>	
--	--	--	--

研究 科 目	地域創成科学特別演習Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別演習Ⅲは、2年次前期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿って決定された研究テーマに基づき、修士論文の骨子を作成することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員) ) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員) ) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員) ) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員) ) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらを通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員) ) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員) ) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員) ) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員) ) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	-------------	--

<p>研究 科目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立について指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集团的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法について指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法について指導を補助する。</p>	
------------------	--	--	--



研究 科 目	地域創成科学特別演習IV	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別演習Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別演習IVは、2年次後期に履修させる。到達目標は、到達目標は、修士論文の完成と研究成果の発表である。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員)) (植物生態学)</p> <p>植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員)) (植生生態学・植生生態工学)</p> <p>自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員)) (植物生態学)</p> <p>森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員)) (動物生態学・応用動物昆虫学)</p> <p>地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらを通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員)) (農業造構学、道路工学)</p> <p>地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員)) (環境生物化学)</p> <p>さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員)) (農地工学)</p> <p>農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員)) (防災科学)</p> <p>自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	--------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立について指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集团的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法について指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法について指導を補助する。</p>	
--	--	--	--

研究 科 目	地域創成科学特別実験 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別実験 I～IVは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別実験 I は、1年次前期に履修させる。到達目標は、地域創成科学特別演習 I で組み立てた研究テーマを推進していくための実験・調査方法を身につけるための予備実験・調査を実施することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員) ) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員) ) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員) ) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員) ) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらの実習・実験を通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員) ) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の關係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員) ) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員) ) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員) ) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因 (災害発生の潜在的な要因) と、災害を引き起こす誘因 (災害発生の引き金となる外的な要因) との關係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>	
--------------	--------------	---	--

<p>研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立についての指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集団的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法についての指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源(自然資源・文化資源)の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法についての指導を補助する。</p>	
----------------------------	--	---	--

研究 科 目	地域創成科学特別実験Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別実験Ⅱは、1年次後期に履修させる。到達目標は、遂行中の実験・調査に加え、地域創成科学特別演習Ⅱの結果、新たに必要となった追加実験・調査を実施することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員)) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員)) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員)) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員)) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらの実習・実験を通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員)) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員)) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員)) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員)) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	-------------	--

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学)  光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立についての指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学)  流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集団的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学)  持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法についての指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学)  持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法についての指導を補助する。</p>	
--	--	---	--

研究 科 目	地域創成科学特別実験Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別実験Ⅲは、2年次前期に履修させる。到達目標は、遂行中の実験・調査に加え、必要な本実験・調査を実施することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員)) (植物生態学)</p> <p>植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員)) (植生生態学・植生生態工学)</p> <p>自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員)) (植物生態学)</p> <p>森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員)) (動物生態学・応用動物昆虫学)</p> <p>地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらの実習・実験を通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員)) (農業造構学、道路工学)</p> <p>地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員)) (環境生物化学)</p> <p>さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員)) (農地工学)</p> <p>農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員)) (防災科学)</p> <p>自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>	
--------------	-------------	--	--

研究 科 目		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立についての指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集团的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法についての指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法についての指導を補助する。</p>	
--------------	--	---	--



研究 科 目	地域創成科学特別実験IV	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、生物文化多様性や土地・社会資本の保全に配慮した持続可能な地域の創成を理念とし、農山村地域が抱える課題の解決と地域の再生をめざした実践的な研究を行う。そのため、保全生態学、地域環境保全学、地域環境工学、地域デザイン学の4つの専門分野において、修士論文の作成に必要な研究の計画、実施、結果の評価、発表、論文作成など、各段階について指導する。地域創成科学特別実験Ⅰ～Ⅳは、修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。</p> <p>地域創成科学特別実験Ⅳは、2年次後期に履修させる。到達目標は、研究内容を精査し、不足の実験・調査を行うとともに、修士論文の完成に向け、研究データのとりまとめを行うことである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次のとおりである。</p> <p>(1 亀山 慶晃 (指導教員)) (植物生態学) 植物の繁殖様式、集団の遺伝的特性、生物間相互作用に着目して、進化・生態・系統地理学的研究を進める。種もしくは集団の起源と維持機構を明らかにすることで、生態系や生物多様性の適切な保全方法について指導する。</p> <p>(2 鈴木 伸一 (指導教員)) (植生生態学・植生生態工学) 自然環境と土地利用の総和である景観について、地域環境保全学に立脚した研究を行う。景観を構成する植物相や植物群落などの植生情報を基本とした研究方法の修得を目的とする。植生情報に関連した研究事例の探索とそれらの評価を行うとともに、自然再生や環境保全に関する応用面における理念や技術について指導する。</p> <p>(3 武生 雅明 (指導教員)) (植物生態学) 森林から草原生態系まで幅広い生態系を対象に、植物生態学と植生学を基盤とする植物の分布、生活史、生理生態的特性についての自然誌研究、多種共存のメカニズムや生態系の成因についての研究、それらの知見を基礎とした地域の生物多様性保全技術について指導する。</p> <p>(4 竹内 将俊 (指導教員)) (動物生態学・応用動物昆虫学) 地域の生態系を構成する動物・昆虫は多岐にわたり、研究対象や研究テーマによって研究手法は異なる。動物種や群集の生息環境とその保全・管理に関する知識や考え方を修得するため、動物の生態や行動とその調査法、環境ならびに人間社会と動物の関係等を扱う。これらの実習・実験を通じて生態系管理の課題の考え方や方法論について指導する。</p> <p>(5 竹内 康 (指導教員)) (農業造構学、道路工学) 地域間の交流や災害時の避難・緊急物資の輸送に利用される広域農道等の舗装道路のストックマネジメント手法の構築を目指す。具体的には、路面に現れる表面的劣化と支持力低下といった構造的劣化の関係性を実験的あるいは数理解析的手法によって探るとともに、合理的な優先順位付けに基づく維持管理方法について指導する。</p> <p>(6 武田 晃治 (指導教員)) (環境生物化学) さまざまな環境に生育する生物の色に着目し、その要因物質について遺伝学・生化学的手法を用いた研究について指導する。要因物質の機能を明らかにすることで、その物質の生物における存在意義や生物を通じた物質循環について考察していく。また、その研究過程で得られた知見を活かした新たな環境科学教育の教材開発についても扱う。</p> <p>(7 藤川 智紀 (指導教員)) (農地工学) 農地の造成、管理方法が環境負荷と生産性に与える影響を理解することで、具体的な対象地において環境負荷が小さく、生産性が高い農業について指導する。また、持続的な農業のために、廃棄物性バイオマスの利用による農村地域全体での環境負荷低減と生産性向上の効果を評価・検討する。</p> <p>(8 本田 尚正 (指導教員)) (防災科学) 自然災害に対する地域防災機能の評価と強化を目的として、現地調査・模型実験・数値解析などの手法により、自然場に内在する災害の素因(災害発生の潜在的な要因)と、災害を引き起こす誘因(災害発生の引き金となる外的な要因)との関係を明らかにし、防災・減災対策について指導する。</p>
--------------	--------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>		<p>(9 浅井 俊光 (指導補助教員)) (環境植物学) 光・水・栄養塩・温度・大気など様々な環境要因に対する植物の形態的・生理的応答を明らかにし、自然再生地における各種環境圧に対する耐性を考慮した植物種の選定や植栽手法の確立、および環境との相互作用や生物間相互作用を考慮した効果的な維持・管理手法の確立についての指導を補助する。</p> <p>(10 入江 彰昭 (指導補助教員)) (地域デザイン学) 流域連携による循環共生の持続可能な地域デザインの構築とその技術手法の提案を目的として、自然・社会・人文環境科学と統合したグリーンインフラに基づく自然立地的適正土地利用計画と、住民・行政・学校・企業等の多様な主体が参画する集団的創造による実践的デザイン手法を提案することについての指導を補助する。</p> <p>(11 下嶋 聖 (指導補助教員)) (環境情報学) 持続可能な地域環境保全システムの確立と広域実装を目的に、GISやリモートセンシングに代表される地理空間情報技術を活用した地域解析や景観解析を用いて、自然環境及び社会環境の両側面から捉えた地域環境の調査・分析・評価手法についての指導を補助する。</p> <p>(12 町田 怜子 (指導補助教員)) (観光学) 持続的な地域創成を目指した計画論の構築、ならびに、技術手法の応用展開を目的として、社会調査手法により、地域資源（自然資源・文化資源）の評価・保全・活用・運営のあり方と、広域的連携を目指した観光まちづくりの実践的手法についての指導を補助する。</p>	
--	--	---	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(地域環境科学研究科 林学専攻 博士後期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域環境科学研究科共通科	研究倫理後期特講	研究を行い、その結果を学術論文としてまとめ、学会で発表を行うためには、研究者として遵守すべき倫理がある。この授業では、研究者が社会に対して負うべき責務を理解し、責務を果たす上で必要な倫理と研究者が持つべき倫理観に関して具体事例を交えて講義する。	
	インターンシップ	学生の将来のキャリア・プランに関して、大学院在学中に一定期間を研究機関、企業などで行う就業体験によって体得することがインターンシップの目的である。インターンシップを通して仕事の本質を理解し、自身の適正の認識と職業観を涵養する。さらにその経験を職業選択に役立たせることを目的とする。	
専攻科目	基礎科目 上級実験・調査計画法	<p>(概要)</p> <p>上級実験・調査計画法では、効率のよい実験方法をデザインし、結果を適切に解析することを目的とした統計学の応用分野としての観点から研究成果の科学的解析手法の習得を目的として講義する。農林学系の試験の着想から基礎研究・応用研究・実用研究へのプロトコールづくりを充実させ、学術的な発表スキルや科学論文(国際雑誌)の執筆におけるスキルアップを目指す。自然科学や社会科学へ広く応用可能な講義内容をオムニバス形式で展開する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回:単位認定者 8 山崎 晃司)</p> <p>(1 上原 巖/2回) 造林学や森林療学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(2 江口 文陽/2回) 林産化学やきのこ学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(3 大林 宏也/2回) 木材理学・木材工学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(4 佐藤 孝吉/2回) 林業経営学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(5 関岡 東生/2回) 林政学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(6 橘 隆一/2回) 治山緑化学などの研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p> <p>(8 山崎 晃司/3回) 森林生態学およびその他林学の研究分野に関する実験調査計画法の基礎から応用までの具体的な方法を教授する。</p>	オムニバス方式

研究科目	特論科目	森林環境保全学後期特論	森林の持続的な高度利用を可能にする保全のあり方を目指して、総合的で高度な研究能力と実践的な技術の活用法を養うことを教育目標とする。その中で森林環境保全学後期特論では、組成と構造による植生型を成立要因と対応させながら理解し、さらに攪乱など、植生が崩壊したあとの動態について遷移、物質生産、多様性の変化などについて理解を深める。国内外の野生動物の生息環境としての森林の役割を学ぶと共に、野生動物の管理の現状と課題についても後期特論ならではの議論を深める。また、森林の成立に重要な土壌環境について特に菌根菌との共生を習熟する。さらに応用分野では緑化による生態系の回復のための技術やモニタリング手法を学び、独立した研究者として活躍するための理解を深めることを目的として教授する。	共同
		森林資源生産学後期特論	木の育成から伐採搬出までの総合的で高度な研究能力を養うことを目的に、森林を育成する応用的な手法（天然更新および人工更新）における樹木生理、森林生態、森林立地、また生物多様性の重要性を理解し、さらに、森林の伐採、搬出に必要な基盤である林道・作業道や林業機械について学修する。特に、後期特論では、国内の現場のみならず森林圏を有する海外の状況にもターゲットを広げ、現在、世界の森林・林業の課題やその解決法の考察、諸外国の森林・林業との比較等も行い、資料には英文誌のみならず、林業先進国の変遷を理解するために独文誌も利用し幅広い知識を習得できるように教授する。	共同
		森林資源利用学後期特論	木質資源は、持続的な利用が可能であり、より高度な利用による環境負軽減が不可欠である。森林資源である木材や特用林産物は、環境負荷に対処するための性質をもともと備えているが、21世紀の科学進歩に即した技術を駆使した活用法を存分に発揮することが環境負荷への限りない軽減を推進するものとする。その目標を達成するための先端的な学理と技術を学び、実用化による産業振興を図るとともに世界のグローバルスタンダード製品としての評価を得るための最新鋭の技術力を探求する発想力を養うことを教授目標とする。特に化学的手法と物理学的手法との評価・検討が可能となるように教育することを目的とする。さらに木質資源利用に関する日本国内の現況のみならず欧州や米国、さらにはオセアニアにおける資源利用の現況と今後の可能性などについても幅広く教授する。	共同
		森林文化情報学後期特論	森林文化情報学は、森林計画学や森林経営学あるいは林業経済学や林政学を基礎に、森林の利用・林業・山村・林産業などに関する多様な情報を分析し、現代社会から未来社会を見据えた森林の文化的・社会的・経済的な高度利用法やそのための森林計画のあり方、地域政策のあり方、あるいは森林教育や森林レクリエーション利用などのための森林計画と森林・林業教育や地域づくりのあり方について文献講読や現地調査分析によって論究することを目的とする。森林文化情報学後期特論では、国外での森林計画学や森林経営学あるいは林業経済学や林政学にも視点をおいて我が国が採るべき政策や今後の有益な学術展開の基礎と応用を深く理解できるように教授する。	共同

研究指導科目	特別研究指導 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻博士後期課程では、国内外の森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を世界的な観点から指導する。その高度な教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別研究指導を行う。この指導は、テーマに即したフィールドや実験室、さらには奥多摩演習林・群馬分収林と提携研究施設などを利用し、課題に適した素材(生物資源や林産物資源)を選択させ、調査方法、実験機器の操作、データの解析等を習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、特別研究指導 I は、博士論文の研究をスタートさせる基礎を構築する時期に設定することから、1年次に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマを決定し、3年間の研究計画書を作成することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 上原 巖(指導教員))(造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(2 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(3 大林 宏也(指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(4 佐藤 孝吉(指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(5 関岡 東生(指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(6 橘 隆一(指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(7 矢部 和弘(指導補助教員))(林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(8 山崎 晃司(指導教員))(森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(9 今井 伸夫(指導補助教員))(森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(10 田中 恵(指導補助教員))(造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(11 桃井 尊央(指導補助教員))(木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(12 山下 詠子(指導補助教員))(林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(13 吉野 聡(指導補助教員))(信連経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------	----------	---	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻博士後期課程では、国内外の森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を世界的な観点から指導する。その高度な教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分枝情報に関する4つの専門分野において、院生の研究課題に応じた特別研究指導を行う。この指導は、テーマに即したフィールドや実験室、さらには奥多摩演習林・群馬分枝林と提携研究施設などを利用し、特別研究指導Ⅰで選定した素材(生物資源や林産物資源)を利用して、調査、実験によって得られたデータを検証する方法について習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、特別研究指導Ⅱは、博士論文の研究を進展させる基礎から応用への転換時期に設定することから、2年次に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマの独創性、新規性、有用性、信頼性、汎用性へ対応させるための検証と深い議論を中心に研究のオリジナリティーを特に意識した指導を実施する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 上原 巖(指導教員))(造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(2 江口 文陽(指導教員))(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(3 大林 宏也(指導教員))(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(4 佐藤 孝吉(指導教員))(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(5 関岡 東生(指導教員))(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(6 橋 隆一(指導教員))(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(7 矢部 和弘(指導補助教員))(林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(8 山崎 晃司(指導教員))(森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(9 今井 伸夫(指導補助教員))(森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(10 田中 恵(指導補助教員))(造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(11 桃井 尊央(指導補助教員))(木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(12 山下 詠子(指導補助教員))(林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(13 吉野 聡(指導補助教員))(信連経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------	---------	---	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>本専攻博士後期課程では、国内外の森林の保全・育成・活用と林産物の高度有効利用を図り、自然循環型の社会形成と人類の持続的発展に役立てる研究・教育を世界的な観点から指導する。その高度な教育目標のために森林環境保全、森林資源生産、森林資源利用、森林分化情報に関する4つの専門分野において院生の研究課題に応じた特別研究指導を行う。調査、実験によって得られたデータを最終的に取りまとめる方法について習熟させることを目的として指導する。</p> <p>なお、特別研究指導Ⅲは、博士論文の研究を終結させる時期に設定することから、3年次に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマの独創性、新規性、有用性、信頼性、汎用性へ対応させるための検証と深い議論を中心に研究の独立した研究者としての基盤構築を意識して指導を実施する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1) 上原 巖(指導教員) (造林学) 森林の造成と健全な保育をはかることは、木材などの林産物生産機能をはじめ環境保全、風致、保健休養などの機能を発揮させる目的を持つ。森林生態および樹木生理・生態をふまえた造林学のあり方について指導する。</p> <p>(2) 江口 文陽(指導教員)(林産化学) 森林から産出される資源の有効活用とその高度利用技術を開発し、天然物からの創薬・創食などの技術について指導する。</p> <p>(3) 大林 宏也 (指導教員)(木材工学) 木材の形成や樹木の生育環境と木材の構造を関連付けて探求し、木材の利用・加工方法について指導する。</p> <p>(4) 佐藤 孝吉 (指導教員)(森林経営学) 森林資源の現状、森林の経営目的と指導原則、伐期、収穫規整、森林の評価など木材生産を中心とした理論から、森林の公共財としての評価について指導する。</p> <p>(5) 関岡 東生 (指導教員)(林政学) 森林に関わる多様な事象を総合的に捉え、社会の問題を発見する能力の基礎と応用について指導する。</p> <p>(6) 橋 隆一 (指導教員)(治山緑化学) 森林は洪水緩和機能や水資源貯留機能などの水源涵養機能を発揮する。水循環に及ぼす森林の影響とその機能を高める森林管理技術について指導する。</p> <p>(7) 矢部 和弘 (指導補助教員) (林業工学) 森林作業を合理的に進めるために森林作業の特質、林業機械の作業方法、作業システム、作業経費、森林路網、労働災害の防止等について指導を補助する。</p> <p>(8) 山崎 晃司 (指導教員) (森林生態学) 森林野生動物の生態や分布の現状について学び、その役割について理解すると共に、将来にわたる人との共存の道について指導する。</p> <p>(9) 今井 伸夫 (指導補助教員) (森林生態学) 森を主とする植生の分布や構造、生態系機能などに関する基礎的理解をするとともに、持続的な森林管理について指導を補助する。</p> <p>(10) 田中 恵 (指導補助教員) (造林学) 森林を構成する樹木の基本的な構造とその機能、成長様式、生殖、物質生産の特徴を学び森林生態系における樹木の環境適応について指導を補助する。</p> <p>(11) 桃井 尊央 (指導補助教員) (木材工学) 木材を最終用途として有効にしかも賢く利用するために性質を正しく理解し、それに基づいた加工法について指導を補助する。</p> <p>(12) 山下 詠子 (指導補助教員) (林政学) 森林の持つ環境的側面について経済学の視点や手法を用いながら森林経営の視点や途上国での実体験などをもとに指導を補助する。</p> <p>(13) 吉野 聡 (指導補助教員) (信連経営学) 森林管理には、森林簿、森林基本図、空中写真などのデータを利用するが、地図を収録できる森林GISはデータベースとして有用である。衛星を利用したリモートセンシングやGPSを利用して森林管理を行う技術について指導を補助する。</p>	
--------	---------	---	--

(注)

1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。

2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書

類を作成する必要はない。



授 業 科 目 の 概 要				
（地域環境科学研究科 農業工学専攻 博士後期課程）				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
地域環境科学研究科共通科目	研究倫理後期特講	研究を行い、その結果を学術論文としてまとめ、学会で発表を行うためには、研究者として遵守すべき倫理がある。この授業では、研究者が社会に対して負うべき責務を理解し、責務を果たす上で必要な倫理と研究者が持つべき倫理観に関して具体事例を交えて講義する。		
	インターンシップ	学生の将来のキャリア・プランに関して、大学院在学中に一定期間を研究機関、企業などで行う就業体験によって体得することがインターンシップの目的である。インターンシップを通して仕事の本質を理解し、自身の適正の認識と職業観を涵養する。さらにその経験を職業選択に役立たせることを目的とする。		
専攻科目	基礎科目	英語論文作成法	博士論文を作成するにあたり、研究、実験を行うには、最新の情報が必要である。最新の情報を得るためには英語の読解力が必要である。また外部への情報公開、英語による論文投稿のために英語を用いることが必須である。よって、本科目は、担当教員の指導課題に沿った科学論文講読を通じて、英文読解、内容の理解と吟味できる能力を養成し、英語論文投稿に必要な能力を身につけることを目標とする。	
	特論科目	地域資源利用工学特論	土地資源、水資源、生物資源を中心として、地域資源の有効利用と保全対策について論考する。農業生産域を中心に土地資源、水資源、生物資源等の地域資源の有効利用のあり方と、土壤保全対策と水環境保全対策を修得して、研究に応用することを学修教育の到達目標とする。日本のみならず海外の具体的事例を取り上げて検討していく。尚、この科目は、院生に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。	
		農村環境工学特論	農業農村のもつ多面的機能の良好な発揮をめざし、農村生態系における生物圏や気圏・水圏・地圏を巡る物質循環とエネルギーフロー及びそれらに対して農業農村が果たしている役割について、土壤物理学・生態学・熱力学などを基礎とした環境科学の面からより深い内容を講義する。また、農業農村の現場における最新の問題や研究内容を事例とし、農村振興を環境工学的な視点から議論する。	
		広域環境情報学特論	広域環境情報・植物生体情報などのその現象の成り立ちを理解し、関係するデータの収集・分析・評価方法を修得するとともに、高度な分析能力・プレゼンテーション能力を醸成することを目指す。リモートセンシングやGISを利用した植生、水資源、土地資源などの評価法を高度化し、広域の視点からの環境情報についてのアプローチに関する高度な手法を修得することを目指す。	
		地水環境工学特論	本講義は、気象学、土壤物理学、水文学、環境物理学などを基礎とし、土と水との関わりについて最新の研究成果を解説しながら農業生産現場での改善技術や農業用水がもつさまざまな機能を理解し、豊かな自然環境と調和した保全・開発を図るための応用技術までを学ぶ。とくに、水の効果的な利用を基に畑地や水田での作物栽培環境の改善技術、さらに気候変動による農業生産環境への影響予測手法や軽減するための応用技術の修得を目標とする。この科目は、学生に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。	共同

専攻科目	特論科目	社会基盤工学特論	社会基盤整備における道路の重要性と意義を理解し、社会基盤として満足すべき具体的性能と、これを実現するための適切な設計の考え方、材料の特質、施工方法についての知識を修得する。またこれらの知識に基づいた博士後期課程における研究の着眼点、必要性について認識する。	
		水利施設工学特論	農業の水利用に関係する施設、ダム、水路、貯水池を対象に、これらの設計法や環境配慮型施設のあり方について講義を行う。なかでも、水文学、水質保全学をベースとした水利用と水環境保全に焦点を当てて、国内外のケーススタディを紹介するとともに、博士後期課程における研究との関連性について、論文講読、プレゼンテーションを交えて講義を進める。そして、水利施設工学に必要な素養を修得するとともに、社会情勢に適合した施設の管理方法や設計方法を修得する。	
		バイオロボティクス特論	(概要) 農業機械における典型的な構造、要素技術に基づいて理解を深めた上で、農業ロボットやバイオロボティクスに関連するアイデア創出、プログラミング、プレゼンテーション、論理的な思考などのさらなる向上を図る。  (オムニバス方式/全15回：単位認定者 7 田島 淳) (4 佐々木 豊/7回) 農業ロボットを理解する上で必要なバイオロボティクスを教授し、高度な技術の修得を促す。特にSTEM学習を重視し、アイデア創出、プレゼンテーションのための技術を修得する。  (7 田島 淳/8回) 農業機械の発達史、耕うん方法の変遷、自動制御の現状について教授し、コンピュータによるシミュレーション等を交え、新たなシステムについて学修する。	オムニバス方式
		農産加工流通工学特論	農産物や食品、花きの加工流通プロセスにおける諸操作の理論とその解析手法並びに物性、品質、鮮度の評価・計測方法の基礎から最新情報について教授する。各種操作の解析では、コンピュータを用いたシミュレーション技法、数値解析解析技法についても解説する。講義に関連した論文講読や施設のについて解説し、最新情報や現場の課題などを把握する。これらを学ぶことにより、課題解決策の提案や新規技術を開発するための応用力を身につけることを目標とする。	

研究指導科目	特別研究指導 I	<p>(概要)</p> <p>農学に関わる博士号取得を目指し、また、見識と実力、さらに健全で調和のとれた人間性を有する研究者あるいは高度専門技術者となるため、研究課題を設定し、研究計画を立案するとともに、技術や研究手法を修得し、研究を実施し、その結果をとりまとめて公表する。これら一連の研究の流れについて修得する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。特別研究指導 I～IIIは博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導 I は、1年次に履修させる。到達目標は、研究課題を設定し、研究計画を立案することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 世界における水資源の現状を整理し、水環境問題に関する課題を抽出するとともに、農業工学分野における水問題の解決策を水文学的手法から検討する手法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) フードチェーンや環境を対象に、情報工学技術を中核に、認識工学、データサイエンス、機械学修、AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発、解析などを行って問題解決を目指す。</p> <p>(5 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を調査実験をとおして実践・修得する。現地においてGNSS、分光放射計をもちいデータ取得し処理・解析方法を修得する。</p> <p>(6 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(7 田島 淳(指導教員))(農業機械学) 本来、植物や動物といった農業生産の対象である作物は自らエネルギーを得て勝手に育つものである。農作業は主にその生育環境をコントロールして生産速度や生産量を高めるためのものである。その補助を行うのが農業機械である。その歴史と将来についてあるべき姿を議論する。</p> <p>(8 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(9 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性（構造、硬さなど）、化学的特性（成分組成、状態など）が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(10 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p> <p>(12 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた実施計画法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>
--------	----------	--

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>	<p>(13 中島 亨(指導補助教員)) (地域資源利用工学)          土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中村 貴彦(指導教員)) (農村環境工学)          土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
---	--	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>農学に関わる博士号取得を目指し、また、見識と実力、さらに健全で調和のとれた人間性を有する研究者あるいは高度専門技術者となるため、研究課題を設定し、研究計画を立案するとともに、技術や研究手法を修得し、研究を実施し、その結果をとりまとめて公表する。これら一連の研究の流れについて修得する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。特別研究指導Ⅰ～Ⅲは博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導Ⅱは、2年次に履修させる。到達目標は、技術や研究手法を修得し、研究を実施する一連の研究の流れについて修得することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 農業に係わる水資源データを収集するとともに、水文学によるデータの解析手法を修得する。また、農業水文学分野、水利施設工学分野における解析データの活用方法についても修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) フードチェーンや環境を対象に、情報工学技術の中核に、認識工学、データサイエンス、機械学修、AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発、解析などを行って問題解決を目指す。</p> <p>(5 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など関係するデータの現地収集・分析・広域解析・評価する方法を調査実験をとおして実践し、取得データを総合的に解析しレビューワークから考察することを修得する。</p> <p>(6 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(7 田島 淳(指導教員))(農作業学) 農業機械の高度な自動化によって達成される農業生産システムにおける農作業のあるべき姿について議論する。</p> <p>(8 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学, 環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(9 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性（構造、硬さなど）、化学的特性（成分組成、状態など）が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(10 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p> <p>(12 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決に向けた解析手法を修得する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
--------	---------	--	--

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>		<p>(13 中島 亨(指導補助教員)) (地域資源利用工学)          土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中村 貴彦(指導教員)) (農村環境工学)          土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
---	--	--	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>農学に関わる博士号取得を目指し、また、見識と実力、さらに健全で調和のとれた人間性を有する研究者あるいは高度専門技術者となるため、研究課題を設定し、研究計画を立案するとともに、技術や研究手法を修得し、研究を実施し、その結果をとりまとめて公表する。これら一連の研究の流れについて修得する。この科目は、必要に応じてバイリンガル（日本語と英語）で実施する。特別研究指導Ⅰ～Ⅲは博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導Ⅲは、3年次に履修させる。到達目標は、設定した研究課題に対して、研究結果を精査しその結果をとりまとめて公表することである。</p> <p>各担当教員の指導課題はつぎのとおりである。</p> <p>(1 江上 親宏(指導補助教員))(非線形現象の数理解析) 自然科学や生命科学の分野で観察される興味深い現象がどのようなメカニズムで起こるのか、その構成要素間の相互作用を数学モデルで表現し、定理を構築することによって、現象の本質の理解を目指す。また、モデル解析のための応用数学的手法の開発だけにとどまらず、解析で捉えた現象を実験により実証する双方向の研究を推進する。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(2 岡澤 宏(指導教員))(水文環境学) 農業水理学、水利施設工学、水質環境学の知識を用いて、農業に關係する水環境問題の解析手法を修得するとともに、学術的な視点から水問題の解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(3 川名 太(指導教員))(社会基盤工学) 構造力学、土質力学、地震工学の知識を用いて、各種構造物の構造解析法を修得するとともに、社会インフラ整備にかかる問題解決に向けた実施計画法を修得する。</p> <p>(4 佐々木 豊(指導教員))(農業情報工学) フードチェーンや環境を対象に、情報工学技術を中核に、認識工学、データサイエンス、機械学修、AI技術などを用いて、ソフトウェア・システム開発、解析などを行って問題解決を目指す。</p> <p>(5 島田 沢彦(指導教員))(広域環境情報学) 地域における広域環境情報・植物生態情報など關係するデータの評価からその対策について議論を行い様々なケーススタディから最適な解決方法を導き出すためのディスカッションを行う。</p> <p>(6 鈴木 伸治(指導教員))(地水環境工学) 熱移動、水移動の測定方法や解析方法の教授を通して、気候変動の影響評価や沙漠緑化にかかわる研究の遂行の仕方について論ずる。</p> <p>(7 田島 淳(指導教員))(農業機械学、農作業学、バイオロボティクス) 農作業の合理化は農業工学分野の重要な課題の一つであるが、その評価基準は時代と共に変化する。現在は作業者の労働負荷や作業安全に加えて、環境負荷や食品の安全性、フェアトレード問題と大きな課題は山積している。その課題解決の一つの方法が環境と融合するロボットの開発である。新しい農作業の考え方について議論する。</p> <p>(8 三原 真智人(指導教員))(地域資源利用学、環境修復保全学) 土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用について学修し、村開発や地域環境の修復保全技術を修得する。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際環境協力における住民参加手法の検討等について理解を深めていく。</p> <p>(9 村松 良樹(指導教員))(農産加工流通工学) 農産物や食品の加工流通プロセスでは、対象材料内部で温度や物理的特性（構造、硬さなど）、化学的特性（成分組成、状態など）が変化する場合がある。これらの現象変化の特性や予測法と制御法を化学工学や食品工学、輸送現象論の基礎理論や数値計算手法に基づいて修得する。</p> <p>(10 渡邊 文雄(指導教員))(地水環境工学) 水の有効利用に関する評価法について教授しながら、水資源の乏しい地域での節水灌漑技術などに関する研究手法についても論ずる。</p> <p>(12 関山 絢子(指導補助教員))(広域環境情報学) リモートセンシング・AIを用いた画像解析の手法を論じ、地域環境の問題解決につなげる総合討論を行う。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
--------	---------	--	--

<p style="text-align: center;">研 究 指 導 科 目</p>		<p>(13 中島 亨(指導補助教員)) (地域資源利用工学)          土地資源・水資源・生物資源を地域資源として捉えて、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を論じる。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(14 中村 貴彦(指導教員)) (農村環境工学)          土地資源に関して、土壌の物理性の評価法の再検討を行い持続して生産可能な農地の管理技術について修得する。また、農地の多面的機能に着目し様々な農地の活用法について修得する。水資源に関しては、水処理技術を検討するとともに参加型の水管理システムについて修得する。さらに農村におけるエネルギー生産の可能性について議論する。</p>	
--	--	--	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。



授 業 科 目 の 概 要				
(地域環境科学研究科 造園学専攻 博士後期課程)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
地域環境科学研究科 共通科目	研究倫理後期特講	研究を行い、その結果を学術論文としてまとめ、学会で発表を行うためには、研究者として遵守すべき倫理がある。この授業では、研究者が社会に対して負うべき責務を理解し、責務を果たす上で必要な倫理と研究者が持つべき倫理観に関して具体事例を交えて講義する。		
	インターンシップ	学生の将来のキャリア・プランに関して、大学院在学中に一定期間を研究機関、企業などで行う就業体験によって体得することがインターンシップの目的である。インターンシップを通して仕事の本質を理解し、自身の適正の認識と職業観を涵養する。さらにその経験を職業選択に役立たせることを目的とする。		
専攻科目	基礎科目	論文英語作成	研究を遂行するために必要な国際的視野の情報の収集、すなわち外国語(英語)の読解力を高める。また研究成果を外部へ発信、発表、すなわち英語による論文投稿を行うための指導を行う。担当教員の指導課題に沿った科学論文講読を通じて、英文読解、内容の理解と吟味できる能力を養成し、具体的な国際誌、国際ワークショップへの論文投稿に必要な能力を身につけることを目標とする。	
	特論科目	造園計画学後期特論	(概要) 造園計画の基本的概念の整理を行う一方、造園計画の具体について、あり方、要素、組み立て、手順について考えるとともに、事例分析を通して課題や問題の発見と設定、理念と具体化の方向、実現への戦略、戦術的展開について修得する。  (オムニバス方式/全15回 単位認定者 2 金子 忠一) (2 金子 忠一/8回) 造園計画学における課題や問題の発見と設定、理念と具体化の方向、実現への戦略、戦術的展開による造園計画のあり方、要素、組み立て、手順について教授する。  (9 荒井 歩/7回) 造園計画学に反映、展開できる具体的な問題や課題の所在、解決のための具体化、解決への実現に向けたアプローチ、戦略的展開など、造園計画のあり方や組み立てなど、その具体的な手順について教授する。	オムニバス方式
		造園設計学後期特論	(概要) 自然と人間が共生する快適な環境の実現に向けて、造園設計の研究領域から、都市および農山村の造園空間を保全、活用、創出するための理論と手法・技術について学ぶ。身の周りの空間から国土空間にわたる多様な空間を対象として、都市、自然、環境、景観などの多面的な観点から、設計学を修得する。  (オムニバス方式/全15回 単位認定者 6 服部 勉) (6 服部 勉/8回) 造園設計学の領域から、都市およびその近郊地域の造園空間を保全、活用、創出するための理論と手法・技術について教授する。  (11 福岡 孝則/7回) 造園設計学への展開から、都市近郊地域および農山村地域を対象とした緑地の機能や保全、緑地活用、緑地創出のための理論と手法・技術について教授する。	オムニバス方式

専攻科目	特論科目	造園植物学後期特論	<p>(概要)</p> <p>調査、計画、設計、施工、管理の基礎となる植物材料について、木本を主とした分類、生理、環境適応、機能性や特性、意匠、文化（歴史）、経済等の側面から究明する力を養う。さらに研究成果から得られた知見と関連する造園植栽の現状や課題との関連を考察し、都市やその周辺地域における植栽や緑化、植生の再生復元・保全・利活用、森づくりや植生の管理・樹木医に資する力を修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回 単位認定者 4 鈴木 貢次郎) (4 鈴木 貢次郎／8回)</p> <p>緑地植物、樹木類など木本植物類を対象とした植物分類、植物生理、植物の生活史や生態を基礎として、造園空間への展開を意図した造園植物の繁殖、二次林などにおける稀少植物の保全、二次林の維持管理、残存する巨木の保全や保護の具体的方法について教授する。</p> <p>(10 金澤 弓子／7回)</p> <p>緑地植物、樹木類など木本植物を対象とした植物分類の視点と具体的方法、また植物生態や植物生活史を基礎とした、緑地空間や里山地域を対象とした緑地植物の保護や保全について教授する。</p>	オムニバス方式
		造園植栽学後期特論	<p>(概要)</p> <p>調査、計画、設計、施工、管理に必要となる植物材料について、草本を主とした分類、生理、環境適応、機能性や特性、意匠、文化（歴史）、経済等の側面から究明する力を養う。さらに研究成果から得られた知見と、関連する造園植栽の現状や課題との関連を考察し、都市やその周辺地域における植栽や緑化に資する力を修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回 単位認定者 5 高橋 新平) (5 高橋 新平／8回)</p> <p>緑化空間における植物の生育環境に関わる諸問題について、植物生理学個体生態学の手法を用いて、劣悪環境下に生育する植物の生育回復などについて究明し、都市やその周辺地域の緑地植物への展開と緑化技術からびに緑化植栽された植物に関わる課題の解決とあり方について教授する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子／7回)</p> <p>都市空間の緑化植栽地、近郊緑地における植物の生育環境に関わる諸問題を、土壌学の視点から究明し、都市やその周辺地域の緑化植栽された土壌基盤を主とした課題の解決とあり方について教授する。</p>	オムニバス方式
		造園施設材料学後期特論	<p>歴史的な伝統造園空間から先端の現代造園空間に用いられる多様な施設の材料を対象に、その種類、用途、仕上げ、加工方法、加工道具、経年変化・劣化、修理方法について習得する。実物の観察と実空間のフィールドワークを通じて、材料が有する美観性、意匠性、機能性、耐久性に関する評価分析能力を養うための具体的内容について教授する。</p>	
		造園施工学後期特論	<p>庭園、都市公園、自然公園など造園空間を創生するための施工法について、造園の工種別の施工法と施工管理の基本にもとづき、環境、機能性、経済性等の側面から造園空間を創生する具体的な方法を習得する。また、得られた方法や技術に関する基礎的知見、造園施工の現状や課題との関連性を考察し、様々な造園空間での計測、基盤整備、維持管理に資する力を養うための一連の具体的な内容について教授する。</p>	

研究指導科目	特別研究指導Ⅰ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と博士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。特別研究指導Ⅰ～Ⅲは、博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導Ⅰは、1年次に履修する。自ら主体的にテーマを決定し、研究計画の立案、その実現に向けて予備および本実験・調査を行うことを目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学)</p> <p>古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント)</p> <p>自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報)</p> <p>空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS(GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探求し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学)</p> <p>造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学)</p> <p>造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする学術(根拠)があり、専攻科目や研究指導科目の中で研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化)</p> <p>日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どのように引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員)) (緑化植栽)</p> <p>植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------	---------	---

<p>研究指導科目</p>		<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント)          自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間や緑地環境の緑景観について、造園計画学、計画論の視点から課題設定、解析、分析できる研究能力、目標とする緑環境を実現するための計画、設計、マネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学)          造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン)          自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
---------------	--	--	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と修士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。特別研究指導Ⅰ～Ⅲは、博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導Ⅱは、2年次に履修する。研究結果を精査し、研究計画の改良・変更を行いながら、博士論文の骨子の作成および本実験を実行することを目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学)</p> <p>古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント)</p> <p>自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報)</p> <p>空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS(GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探索し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学)</p> <p>造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学)</p> <p>造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする学術(根拠)があり、専攻科目や研究指導科目の中で研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化)</p> <p>日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭千 鶴子 (指導教員)) (緑化植栽)</p> <p>植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------	---------	--

<p>研究 指導 科目</p>		<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間や緑地環境の緑景観について、造園計画学、計画論の視点から課題設定、解析、分析できる研究能力、目標とする緑環境を実現するための計画、設計、マネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学)      造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景（文化等）も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン)      自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
-------------------------	--	--	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅲ	<p>(概要)</p> <p>人と自然との共生を、生物学を基本に総合的に科学する「造園学的アプローチ」で研究する。造園学の基本的なステップとなる総論、造園史、調査法、計画、設計、施工、材料(生物と無機物)、管理に関わる高度な知識と技術を得る上で必要となる研究手法、応用能力の深化・総合力と博士論文作成能力に関して、研究の実践、指導を行う。特別研究指導Ⅰ～Ⅲは、博士論文が完成するまでのプロセスを3段階に分ける。特別研究指導Ⅲは、3年次に履修する。博士論文の完成と論文投稿を含めた成果の発表を目標とする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 栗野 隆 (指導教員)) (造園施設材料学) 古代から近現代に至る日本を軸とした東アジア庭園史(日本・中国・韓国・台湾)の編成が第一の研究課題である。庭園を構成する造園施設材料(石材、木材等)の特徴・機能・用途の体系化が第二の研究課題である。これらの課題を融合し、庭園の歴史的評価と脆弱性の把握に基づく保存・修復方法の確立について指導を行う。</p> <p>(2 金子 忠一 (指導教員)) (景観・緑地環境マネジメント) 自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を行う。</p> <p>(3 國井 洋一 (指導教員)) (造園建設・空間情報) 空間情報技術による造園空間の形成や3次元情報の取得手法について研究指導を行う。写真測量やレーザ測量、GNSS (GPS)、GISといった各種技術により、日本庭園や都市公園、自然公園などの幅広いフィールドに対する定量的な情報を取得するための方法論を探求し、得られた情報の利活用を含めた応用力を養うための指導を行う。</p> <p>(4 鈴木 貢次郎 (指導教員)) (造園植物学) 造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(5 高橋 新平 (指導教員)) (緑化植栽学) 造園空間における緑には、植物が個や群で土地の上に存在(成立)すること、あるいはその空間を意味しているため、植物生態や植物生理を基本とした緑化植栽計画・緑化植栽(施工)・緑化植栽管理・緑化植栽マネジメント・等の一連の展開を重要としている。その背景や根拠には緑化植栽の技術、それを裏付けする学術(根拠)があり、専攻科目や研究指導科目の中で研究能力を養う指導を行う。</p> <p>(6 服部 勉 (指導教員)) (庭園文化) 日本の庭園を中心に名勝や、歴史的まちづくりの資源となる造園空間を対象として、その変容過程、社会・文化的背景との関連性、空間構成上の特徴、造園史的評価・意味などの検証に加え、今後どの様に引き継ぐべきかを考える上で必要となる保存・修復・復原・利活用計画などの検討についても指導する。</p> <p>(7 水庭 千鶴子 (指導教員)) (緑化植栽) 植栽される植物とその環境との相互作用について、特に物質移動の観点から解明することを第一の指導課題として挙げている。具体的には、環境(大気、土壌、水質)汚染物質等の吸収に関する機能、効果について明らかにするため、実験手法、解析、分析等に関して研究能力および研究遂行能力を高める指導を行う。</p>
--------	---------	--

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>	<p>(9 荒井 歩 (指導補助教員)) (景観・緑地環境マネジメント)          自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間や緑地環境の緑景観について、造園計画学、計画論の視点から課題設定、解析、分析できる研究能力、目標とする緑環境を実現するための計画、設計、マネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p> <p>(10 金澤 弓子 (指導補助教員)) (造園植物学)          造園空間の基本構成材料である植物を主対象として、保護と保全、利用を図る。植物分類学、植物地理学、生理学、生態学を応用し、樹芸や草本の活用への展開を目標とする。造園植物の繁殖、応用生態、樹木医研究を進めるための各種計測技術や植栽技術を、社会的背景(文化等)も鑑みながら研究能力を養う指導を補助する。</p> <p>(11 福岡 孝則 (指導補助教員)) (ランドスケープデザイン)          自然と人間が共生する快適な環境の創造を目標として、都市域、中山間地域、自然地域の造園空間ならびに地域環境を対象として、造園学の計画論、デザイン論、マネジメント論の視点から本質論と応用論を論及する研究能力、目標とする環境を実現するための計画・設計ならびにマネジメントの技術力を養う指導を補助する。</p>	
---	--	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。



学校法人東京農業大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度

入学 編入学 収容  
定員 定員 定員

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
畜産学専攻(M)	10	—	20
バイオセラピー学専攻(M)	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	12	—	24
林学専攻(M)	8	—	16
農業工学専攻(M)	12	—	24
造園学専攻(M)	12	—	24
国際農業開発学専攻(M)	10	—	20
農業経済学専攻(M)	12	—	24
国際バイオビジネス学専攻(M)	5	—	15
農学専攻(D)	4	—	12
畜産学専攻(D)	3	—	9
バイオセラピー学専攻(D)	6	—	18
バイオサイエンス専攻(D)	4	—	12
林学専攻(D)	2	—	6
農業工学専攻(D)	3	—	9
造園学専攻(D)	2	—	6
国際農業開発学専攻(D)	5	—	15
農業経済学専攻(D)	5	—	15
国際バイオビジネス学専攻(D)	5	—	15
環境共生学専攻(D)	—	—	—
応用生物科学研究科	30	—	60
農芸化学専攻(M)	20	—	40
醸造学専攻(M)	20	—	40
食品安全健康学専攻(M)	6	—	12
食品栄養学専攻(M)	5	—	15
農芸化学専攻(D)	2	—	6
醸造学専攻(D)	3	—	9
食品安全健康学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)	—	—	—

令和3年度

入学 編入学 収容  
定員 定員 定員

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28	
農学専攻(M)	12	—	24	名称変更
動物科学専攻(M)	10	—	20	
バイオセラピー学専攻(M)	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	5	—	15	
	4	—	12	名称変更
農学専攻(D)	3	—	9	
動物科学専攻(D)	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
バイオセラピー学専攻(D)	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
	0	—	0	令和3年4月学生募集停止
応用生物科学研究科	30	—	60	
農芸化学専攻(M)	20	—	40	
醸造学専攻(M)	20	—	40	
食品安全健康学専攻(M)	6	—	12	
食品栄養学専攻(M)	5	—	15	
農芸化学専攻(D)	2	—	6	
醸造学専攻(D)	3	—	9	
食品安全健康学専攻(D)	2	—	6	
食品栄養学専攻(D)	—	—	—	
生命科学研究所	30	—	60	研究科の設置(届出)
バイオサイエンス専攻(M)	20	—	40	
分子生命科学専攻(M)	20	—	40	
分子微生物学専攻(M)	5	—	15	
バイオサイエンス専攻(D)	—	—	—	

生物産業学専攻(M)	7	14
生物生産学専攻(M)	5	10
アグアバイオ学専攻(M)	5	10
食品香粧学専攻(M)	3	6
産業経営学専攻(M)	8	24
生物産業学専攻(D)	—	—
計	292	648

地域環境科学専攻(M)	8	16
林学専攻(M)	8	16
農業工学専攻(M)	—	—
造園学専攻(M)	10	20
地域創成科学専攻(M)	6	12
地学専攻(D)	2	6
林学専攻(D)	2	6
農業工学専攻(D)	2	6
造園学専攻(D)	2	6
国際食料農業科学専攻(M)	18	36
国際農業開発学専攻(M)	8	16
農業経済学専攻(M)	—	—
国際アグリビジネス学専攻(M)	10	20
国際食農科学専攻(M)	7	14
国際農業開発学専攻(D)	2	6
農業経済学専攻(D)	2	6
国際アグリビジネス学専攻(D)	2	6
生物産業学専攻(M)	7	14
生物生産学専攻(M)	5	10
アグアバイオ学専攻(M)	5	10
食品香粧学専攻(M)	3	6
産業経営学専攻(M)	8	24
生物産業学専攻(D)	—	—
計	326	701

東京農業大学		3年次
農学部<神奈川県厚木市>		
農学科	170	680
畜産学科	140	560
生物資源開発学科	125	500
デザイン農学科	123	492
応用生物科学部<東京都世田谷区>		
農芸化学科	150	600
醸造科学科	150	600
食品安全健康学科	150	600
栄養科学科	120	480
生命科学部<東京都世田谷区>		
バイオサイエンス学科	150	600
分子生命科学科	130	520
分子微生物学科	130	520
地域環境科学部<東京都世田谷区>		
森林総合科学科	130	520
生産環境工学科	130	520
造園科学科	130	520
地域創成科学科	100	400
国際食料情報学部<東京都世田谷区>		
国際農業開発学科	150	600
食料環境経済学科	190	760
国際バイオビジネス学科	150	600
国際食農科学科	110	440
生物産業学部<北海道網走市>		
北方圏農学科	91	364
海洋水産学科	91	364
食香粧化学科	91	364
自然資源経営学科	90	360
計		2,991
		11,964

東京農業大学		3年次
農学部<神奈川県厚木市>		
農学科	170	680
畜産学科	140	560
生物資源開発学科	125	500
デザイン農学科	123	492
応用生物科学部<東京都世田谷区>		
農芸化学科	150	600
醸造科学科	150	600
食品安全健康学科	150	600
栄養科学科	120	480
生命科学部<東京都世田谷区>		
バイオサイエンス学科	150	600
分子生命科学科	130	520
分子微生物学科	130	520
地域環境科学部<東京都世田谷区>		
森林総合科学科	130	520
生産環境工学科	130	520
造園科学科	130	520
地域創成科学科	100	400
国際食料情報学部<東京都世田谷区>		
国際農業開発学科	150	600
食料環境経済学科	190	760
国際バイオビジネス学科	150	600
国際食農科学科	110	440
生物産業学部<北海道網走市>		
北方圏農学科	91	364
海洋水産学科	91	364
食香粧化学科	91	364
自然資源経営学科	90	360
計		2,991
		11,964

東京情報大学			
総合情報学部	3年次		
総合情報学科	400	10	1,620
看護学部			
看護学科	100	-	400
計	500	10	2,020

東京情報大学大学院			
総合情報学研究科			
総合情報学専攻(M)	15	-	30
総合情報学専攻(D)	3	-	9
計	18		39

→

東京情報大学			
総合情報学部	3年次		
総合情報学科	400	10	1,620
看護学部			
看護学科	100	-	400
計	500	10	2,020

→

東京情報大学大学院			
総合情報学研究科			
総合情報学専攻(M)	15	-	30
総合情報学専攻(D)	3	-	9
計	18		39